

569-425



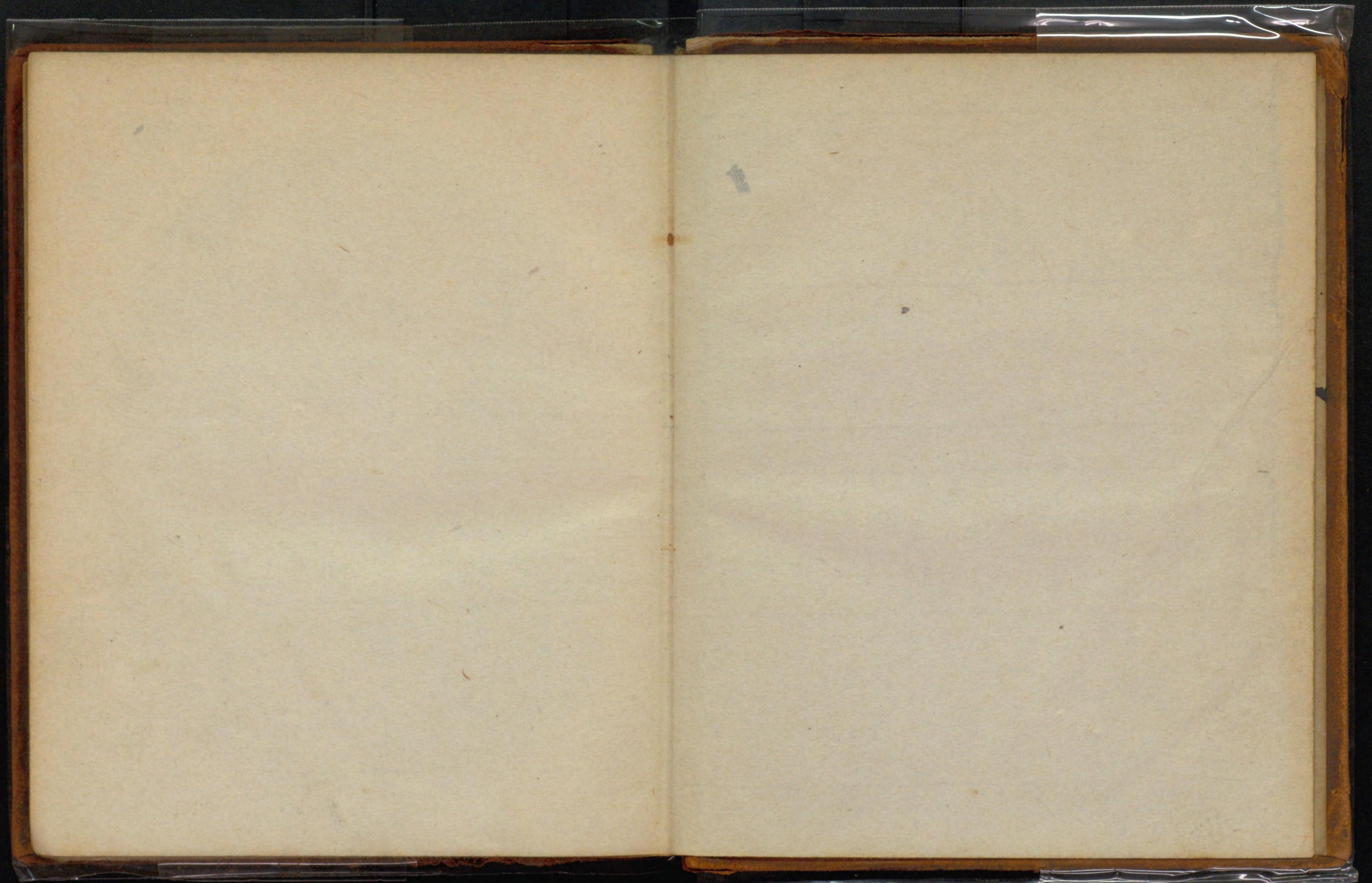
1200501517969

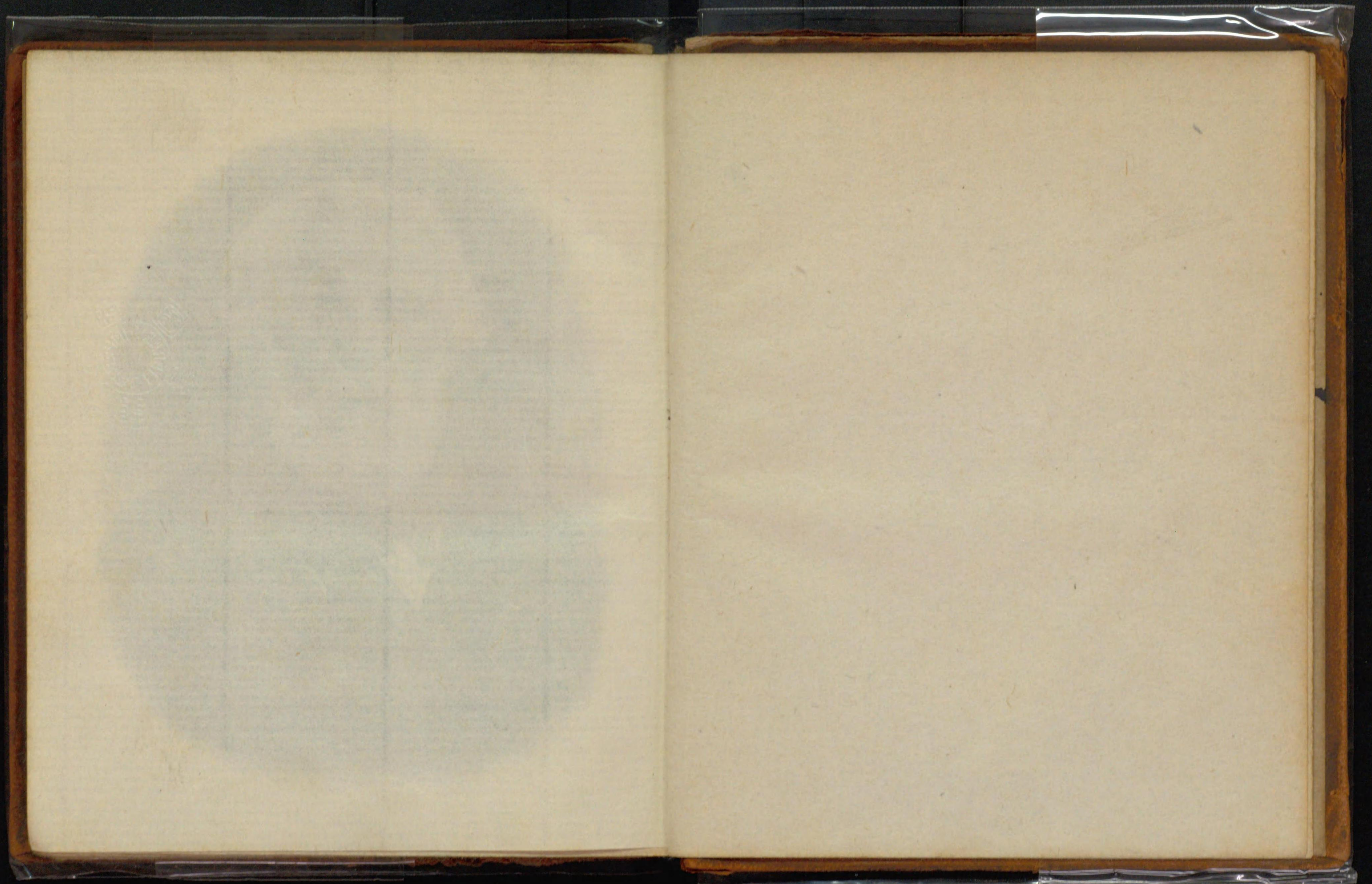
569

25

И. С.
СТИХОТВОРЕНИЯ В ПРОЗЕ



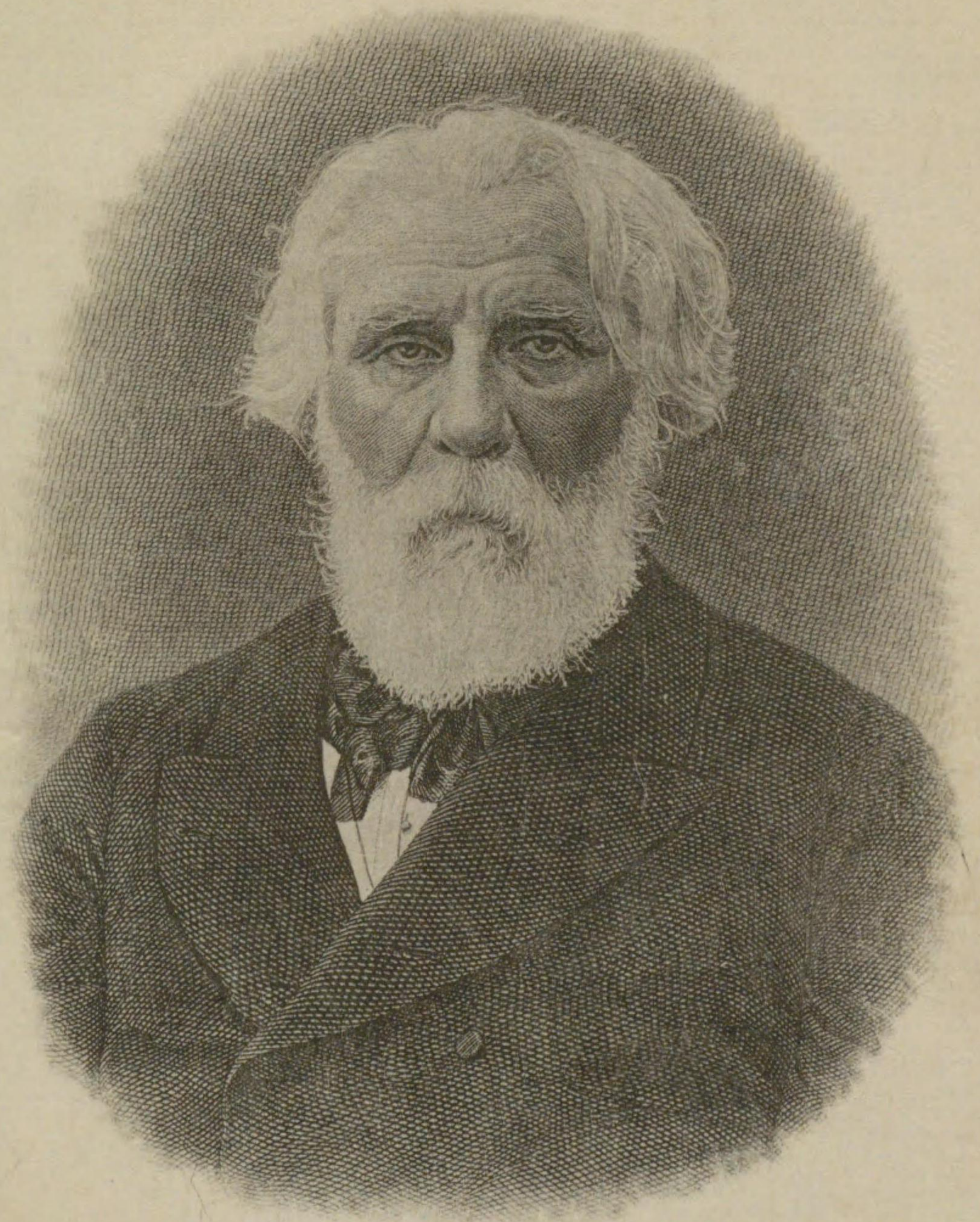




フネエゲルツ
譯 全
詩 文 散
譯 郎 三 省 山 中



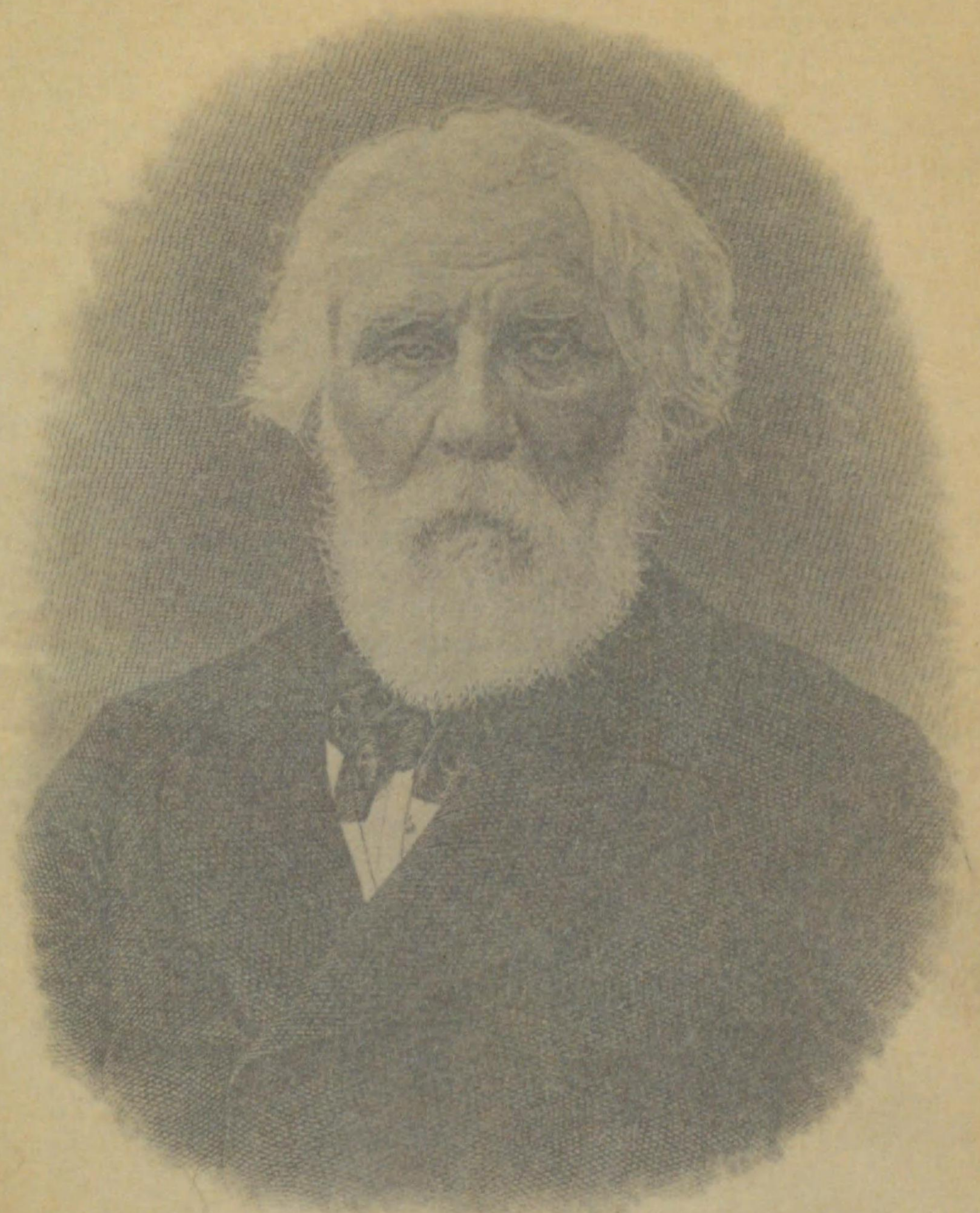
京 東
房 書 一 第

フネエゲルツ
 譯 全
 詩 文 散
 譯 郎 三 省 山 中



京 東
 房 書 一 第

569-425.

譯者覺書

ツルゲエネフの散文詩は、一八七七年七月から死の前年、一八八二年の十一月に至る六年間の生活に於ける種々の印象を書きとどめたものであつた。私たちはすぐれたる感性によつて示されたこれらの散文詩のうちに、ツルゲエネフが未だ直截に語りえなかつた彼自身の風貌を見るのである。

ツルゲエネフは一八六〇年の『ハムレット』とドン・キホーテ』についての講演のうちで、ハムレットの特質について語るものであつた、『ハムレット』は自我を信ずることが能きなかつた。しかもこの自我こそは彼にとつて尊いものであつた。自我こそは彼が絶えず立ちかへるところの出発点であつた。彼は自分自身の弱さをよく知つてゐた。自身が何を欲するのか、また何ゆゑに生きてゐるのかを知らずに、彼は人生に執着をもつてゐた。『私たちは、彼の

多くの作品をとほして、あれほどまでにドン・キホーテ型を讀へてゐた彼のうちに、あまりにも多くハムレットのタイプを感じて來たが、今この散文詩の幾つかのうちにも、彼のハムレット型は感じられるのである。しかも生に對する執着は、決して意識的な生命への意志にもとづくものではなく、恐怖や不安から逃れて、神のうちに自由を見出さうとする極めて本能的なものであつた。かかる場合に恐怖や不安は生の現實からよりも寧ろ死そのものに對する觀念から來るのであつた。

時として彼は生ける人間にあふるるばかりの熱情と力をもつて見、感じ、且つ考へる。然しながら彼の肉體の力は衰へて、身體の均衡は失はれ、死の近づいた思ひに惱まされるのであつた。

憐憫、老衰、死、忘却——これらのモチーフは絶えず立ちかへつて來る。作者自身が、この散文詩集を世に發表せんとした時、SENILIA(老いらく)といふ標題を附けたといふ事實には、かなり謙讓の意味が含まれてゐたと解するにしても、これらの散文詩はまぎれもなく、悲劇的な老年の詩であつた。

*

ツルゲエネフの散文詩はもともと作者に發表しようとする意志なくして書かれたものであつたが、偶然にも雑誌『歐羅巴報知』の編輯者の懇望によつて、五十篇を選んで一八八二年十二月の同誌に編輯者のはしがきを附して、發表されたものである。編輯者はツルゲエネフ自身の『この詩のよき讀者が一いきに讀まれないことを望む、一いきに讀まれたならば、必らずや退屈を來し、この冊子は手から落されるであらう。どうか少しづつ讀んでいただき、今日はこれ、明日はあれといふ風に。さうしたならば、この詩の或るものは讀者の心に何もものを與へることであらう。』といふ言葉を引用して、發表するに至つた仔細を述べてゐる。作者は發表するに當つて、民衆に讀まれるといふことには、いささかの期待をもかけてはゐなかつたが、間もなく西歐諸國語にも翻譯せられ、夙くから邦語にも移植されてゐたものである。この最初の散文詩は作者の最初の意志にもとづいて、この集に於ては『セニリア』の標題のもとに輯めて置いた。ただ『閩』の一篇は、校正の際に作者によつて削除せられ、死後に發表されたものである。『未發表散文詩』の標題の

もとに譯載したものは一九三〇年、巴里に於てア・マゾン教授によつて初めて發表された『新散文詩集』に據つた。これ等の散文詩は、作者が嘗て『嚴密な意味に於てあまりにも個人的な、自傳的なもの』として、發表を見合はせたものであつた。

*

譯者は作者の死後五十年を経た今日、ここに露西亞語からの最初の全譯を公けにするに當つて、長谷川巳之吉氏が譯者に對して示された深い理解と好意とに對して、ただただ感謝の念の切なるを覺える。

昭和八年一月

譯

者

セニリア

田舎

時は七月、終りの日、このあたり一千露里、露西亞國、わが郷土。
涯り知られぬ暗藍色に濡れわたる空、ただひとときの離れ雲、浮ぶともな
く、消ゆるともなく。日は暖かに、風もなく、……空氣はしぼりたての牛乳の
やうだ！

雲雀は空高く囀り、野鳩はくくと鳴き、聲もなく燕翔る。馬は鼻鳴らし
ては、ものを噛み、犬は吠えもせず、しづかに尾を振りながら佇つてゐる。

煙の匂ひ、草の香ひ、あるかなきかの煙脂の匂ひ、ほのかにほふ獸皮の
匂ひ。大麻は今を盛りと、重苦しくも、快よい香ひを放つてゐる。

深くはあるが、なだらかに下りてゐる谿。兩側には、頭の大きな、根元に

近く幹の裂けた楊柳、幾列かに立ちならんで。谿間には、せせらぎが趨つてゐる。底には耀やく漣を透いて、小石がふるへてゐるやうに見える。はるかに遠く、天と地のきはまるころ、大河の青い川筋が見える。

この谿に沿うて、一方には綺麗な納屋や、しつかりと戸を閉ざした物置があり、また一方には松丸太づくりの板葺の小舎、五つ六つ。屋根ごとに椋鳥の巣箱をつけた長い棹を高く立てて、どの戸口にも鐵製の、剛い鬘の馬の雛型がかかつてゐる。凹凸のはげしい窓硝子、虹彩に光る。鎧戸には花束をさした花瓶が筆拙く描かれてある。どの小舎の前にも、一つづつきちんと、出来のよい、小さな腰掛が置いてあつて、家のまはりの土堡の上には、透きとほるやうな耳をそばだてて、猫が背を丸めてゐる。高い敷居のむかうには、涼しげにかける外房があつた。

私はいま、馬衣を擴げて、谿の眞際に横たはる。あたりには刈りたての、疲れるばかりに香ひのよい干草が山と積まれてゐる。抜目のない主人は、小舎の前に干草を撒き散らしたが、いましばらく日向に乾かし、それから納屋に收

めたらよいであらう！ さうすれば、きつとよく眠れることであらう、あの上

どの草堆の中からも、縮れ毛の童子の頭が覗いて見える、冠毛のある鶏は乾草をかきわけて、ちひさな薊馬や甲蟲をあさり、鼻面の白い仔犬は、もつれた草の中をころげ廻る。

亞麻色の縮れた髪をした若者たちは、さつぱりした襯衣のうへに、帯を低くしめ、縁取のついた重たい長靴をはいて、馬具をとり外した車にもたれ、ざれ言を交はしては、白い齒並を見せてゐる。

窓からは丸顔の若い女が覗いて、若者の話や積草の中を童子らがはねまはるのに笑つてゐる。

もう一人の若い女は逞しい腕に、濡れた大釣瓶を井戸から汲みあげてゐる……。釣瓶は繩について、長く火のやうにかがやく雫をおとしながら、しきりに揺れる。

私の前には新しい格子縞の袴をつけ、新しい靴をはいた年老いた家婦が立

つてゐる。

日に焦けた瘠せた頸には、大きな空洞の玉を三筋に巻きつけ、赤い斑點を散らした黄色な頭巾に白髪をつつみ、頭巾はぼんやりと曇つた眼のうへに垂れてゐる。

けれど、年老いた眼は、人なつこげに笑ひを浮べ、すつかり皺のよつた顔にも笑ひが浮んでゐる。おそらく、このお婆さんは七十の阪には手がとどいてゐるであらう……しかも、若かつた頃には、きつと美人であつたらうと、その面影が今もなほ忍ばれる。

右の手の日に焦けた指をおしひろげて、お婆さんは今の今、地窖から出して來たばかりの、冷えた、鮮しい生乳の入つた壺を持ち、壺のまはりには眞珠のやうな乳の滴におほはれてゐる。左手の掌にまだ温い麵麩の大きな片をのせて差出してゐる。『旅のお方、よろこそ、さあ、どうぞ、おあがり！』とでもいふのであらう。

俄かに雄鶏がときをついて、忙しさうに羽ばたきすれば、小舎に閉ぢこめ

られてゐた仔牛はゆつたりと、それに應へる。

『あつ、こりやすばらしい燕麥！』私の馭者のこゑが聞える……。

ああ、露西亞の、自由な田舎の満足よ、平穩よ、豊饒よ、ああ、靜寂と天の恵みよ！

私にはかういふことが考へられる、君士坦丁なる聖ソフィア寺院の圓頂閣に十字架を樹てようとか、私たち都市の者がかうもむきになつて徴めてゐる、ありとあらゆる事どもが、ここで一體、私たちに何の價値があるものかと。

會話

『ユングフラウもフィンステラルホルンも未だ曾て人跡をしる
せしことなし!』

アルプスの高嶺……ただうち續く嶮々たる峻崖……山脈の眞つただ中。
山々の上にひろがる淺緑の、明るい、物いはぬ空。身に沁みわたる嚴しい
寒氣。さんらんたる堅雪。雪をつきぬけて聳える、氷にとざされ、風に吹きさ
らされた磊々たる岩塊。

地平線の兩端にそぼ立つ二つの大山塊、二人の巨人、ユングフラウとフィ
ンステラルホルンと。

ユングフラウは隣人に向つていふ、『何か新しいことでもあつて? あな
たには、わたしよりはよく見えるでせうね。あの、麓には何がありますか?』
幾千年は過ぎる、瞬く間に。すると答へるフィンステラルホルンの轟き、

『叢雲が地を蔽うてゐる……。暫らく待て!』

また幾千年は過ぎる、ただ一瞬にして。

『さあ、今度は?』 ユングフラウが訊ねる。

『今度は見える。下の方はまだ、もとのままだ、まばらに、こまごまと。
水は青み、森は黒み、累々たる岩石は灰色に。それらの周圍には今もなほ、て
んたうむしがうごめいてゐる。ほら、あの未だ、君や僕を穢すことの能きなか
つた二足動物がさ。』

『それは人間のことなの?』

『うん、人間だ。』

何千年かは過ぎてゆく、たちまちにして。

『さあ、今度は?』 ユングフラウが訊ねる。

『てんたうむしは前よりは少ししか見えないやうだ。』

フィンステラルホルンは轟く、『下の方は、はつきりして來た、水はひ
いて、森はまばらになつた。』

更にまた何千年かは打ち過ぎる、曇^{しほ}しの間に。

『あなた、何が見えますの？』 ユングフラウがいふ。

『僕たちの身のまはり綺麗になつたやうだ、』フィンスターアルホルンが答へる、『けれど、あの遠くの谿間にはやはり斑^{しみ}点がある、そして何だか動いてゐるよ。』『さあ、今度は？』と、また幾千年かが、たちまちにして過ぎ去ると、ユングフラウが訊ねる。

『今度はいいぞ、』フィンスターアルホルンが答へる、『どこもかしこも、さつぱりして来た、どこを見ても眞白だ……、ここもかしこもこの雪だ、一面に、それにこの氷だ……何もかも凍つてしまつた、今はいい、ひっそりしてゐて。』『いいわね、』ユングフラウがいひ出した、『ところで、おぢいさん、あんとするぶんお喋りをしましたねえ。もう一寝入りする時分です。』

『さうぢやな。』

大きな山々は眠つてゐる、緑いろの、澄みわたつた空も、永遠におし黙つた大地のうへに眠つてゐる。

老婆

私はただひとり曠い野原を歩いてゐた。

すると、ふと私のうしろに軽やかな、慎ましやかな、足音^{あしおと}が聞えるのであつた……誰かが私のあとを跟いて来たのだ。ふりかへつて見ると、灰色の襤褸を着た、小さな、腰のまがつた老婆だつた。襤褸のなかから老婆の顔ばかりが見えてゐた。黄いろな、皺だらけの、鼻の尖つた、齒のない顔である。

私はそばへ近づいた……老婆は立ちどまつた。

『お前さんは誰だね？ 何が欲しいの？ お前さん、乞食？ 施^{ほどこし}與を待つてゐるの？』

老婆は答へなかつた。私は老婆の方に身をかがめて見て、眼が兩方とも半透明の白ちやけた薄皮か、或る種の鳥に見られるやうな膜に蔽はれてゐるのに

気がついた。さうしたものは極めて明るい光から眼を庇護つてゐるものであつた。けれど、この老婆にあつては、この膜は動かさず、瞳を蔽つてゐるばかりであつた、そこで、私は彼女が要するに盲目なのだと思へた。

『施與が欲しいのかね？』と私は、もう一度、訊いて見た、『お前さん、どうして僕のを跟いて来るの？』しかし、老婆はやはり返事をしなかつた。ただわづかに身を退縮めるばかりであつた。

私は身を返して、さつさと歩き出した。

するとまた例の軽やかな、規則正しい、忍び足ともいふべき蹠音が聞える。『またこの死女郎が！』と私は考へた、『何だつて、おれにつきまといやがるんだ？』しかし、そこでまた私は心の中にすぐに附け加へた、『たぶん眼が見えないので、道に迷ひ、一しよに人里へ出ようと思つて、おれの蹠音をたよりに、かうして歩いてゐるのだらう、さうだ、てつきりさうだ。』

けれど妙に不安な氣持が私の心をだんだんと捉へてしまふのであつた。この老婆は、私に跟いて来るばかりでなく、私を指圖し、右に左におしやつて、

私は知らず識らずのうちに彼女に従つてゐるのだと考へ出した。

それでも私はなほ歩きつづける……しかも、見よ、私の行く手には、何か黒くひろがつてゐる……穴のやうなものが……『墓！』私の頭にひらめいた、『たしかにおれをあそこへ追ひやらうといふのだな！』

私はさつと振りかへつた。老婆はまた私と對ひ合つた……しかも今は眼が見えるのである！老婆は、大きな、殘忍な、忌はしい眼で、……鷺鳥の眼で、私を見てゐる……私は彼女の顔を、彼女の眼をきつと見た……するとまた例の曇つた膜、例の盲目の、魯鈍な顔つき……『ああ』と私は考へる『この老婆は……おれの運命だ。人間には遁れられない運命なんだ！』

『遁れられない！ 遁れられない！ 何といふ狂氣の沙汰だ……それにしてもやつて見る必要があるんだ！』そこで私は、わきの、違つた方へ進んで行つた。

大いそぎに私は歩いて行く……けれど私のあとに、近く、近く、またあの軽い蹠音がかさかさと聞える……前にはまた穴が黒く。

私はまた方向を變へる……後にはまた、あの聲音がかさかさとして。前には同じ怖ろしい點が。追はれてゐる鬼のやうに、どんなにもがいても……やはり同じことだ！ 同じことだ。

『待てよ！』と私は考へる、『ひとつ誑してやらう！ どこへも行くまい！』私はすぐに地べたに坐つてしまふ。

老婆は私から二歩ほどしろに立つてゐる。……もう聲音は聞えないが、そこに老婆のゐることを感ずる。

ふと、見やると遠くの方に黒く見えてゐた點が漂ひながら、私の方へと這つてくる。

嗟呼、神よ！ 私はふりかへる、老婆はちつと私を見てゐる……齒のない口は、微笑に歪んでゐる。

「遁れられないんだ！」

『……』

譯者註……「多くの人、彼に最も近い人すらも、ツルゲエネフが老いらくの憂愁にとりかこまれて、ベシミスティックな内容をもつた散文詩を書いてゐることを知らなかつた。詩の多くは夢に見た話であつた、例へば「老婆」のごときファンタステイックな話は死の免れがたいことを描いてゐる。ある年の夏の夕べ、ベルリンで、シユミットのところではこの夢の話をした。私たちはこの話を聞いてゐるとぞくぞくとして冷汗の流れる思ひをした。」とエル・ピッチは語つてゐる。（「ツルゲエネフに關する外國人の批評」による。）

犬

部屋のなかには私たち、ふたり、いとしい犬と私と……戸外には怖ろしい嵐が哮えてゐる。

犬は私の前にすわり——私の眼をまともに見まもつてゐる。

私もまた犬の眼を見てゐる。

犬は何か私に言ひたげに見える。犬はものを言はない、犬には言葉がない、犬には自分自身がわからない——しかも私は犬をよく識つてゐる。

私には、この瞬間に、犬にも私にも一つの同じい感情が流れてゐて、私たちの間には何等のへだたりもないことがわかる。私たちは同じものである、お

互ひの中には同じやうな、ふるへる火焰が燃え耀いてゐるのである。

死は飛びおりて来る、冷たい広い翼をはばたく……

かくて最後である。

やがて私たちふたりのうちに燃えてゐた焰がどんなものであつたかを誰が識別しうるであらう。

否、互ひに眼を見交はすふたりは動物でもなく、人間でもないのである。

互ひに見交はす眼は同じ眼の二對なのだ！

この對のいづれにも、動物にも、人間にも、一つの同じい生命が、おづおづと互ひに寄り添つてゐるのである！

競争相手

私には友だちの競争相手があつた。別に、仕事や職務や戀の上での相手ではなかつたが、何ごとによらず二人の見解は一致せず、會へば必らず二人の間には、果しもない議論が起るのであつた。

二人は事ごとに言ひ争つた、藝術や、宗教や、科學について、現世や、來世の生活について、とりわけても來世の生活について。

彼は信心家で、熱情家であつた。ある時、彼は私にかういつた、『君は何事でもあざ笑ふけれど、若しも僕が君より先に死んだら、きつと僕はあの世から、君のところへやつて来るよ……その時に君が嗤ふかどうか知りたいものだ。』

果せるかな、彼は私よりも先きに、未だ若い身空で死んで行つた。けれど、いく歳か過ぎて、私は彼の約束を——彼の威嚇を忘れはてしてしまつてゐた。

ある夜のこと、私は床に就いたが、眠れなかつた、尤も眠りたくもなかつ

たのである。部屋の中は暗くも、明るくもなかつた。私は灰色の薄ら闇を見つめかけた。

すると俄かに、二つの窓の間に、私の競争相手が佇つてゐて、しづかに、悲しさうに、頭を上になに振つてゐるやうに見えるのであつた。

私は怖れはしなかつた、愕きもしなかつた……けれど、そつと起き上つて、肘をついて、不意にあらはれて來た幻影を一層氣をつけて見つめはじめた。

幻影は頭を振りつづけてゐた。

『何だといふんだ。』私はつひに口を切つた、『君は勝ち誇つてゐるのか、嘆いてゐるのか。どうなんだ、おれを警戒するのか、責めるのか。それとも君が間違つてゐるとか、二人とも間違つてゐるとか識らしたいのか。君は何を経験してゐるんだ、地獄の苦患か、天國の法悦か。せめてただ一言でも言ひたまへ！』

然し競争相手はただ一言も發せず——相變らず悲しげに、素直に、頭を上下に振つてゐるばかりであつた。

私は笑ひ出した——彼は消えてしまつた。

乞食

私は街を通つてゐた……老いぼれた乞食が私をひきとめた。

血走つて、涙ぐんだ眼、蒼ざめた唇、ひどい襤褸、きたならしい傷……あ、この不幸な人間を、貧窮がかくも醜く喰ひまくつたのだ。

彼は紅い、むくんだ、穢い手を私にさしのべた。

彼は呻くやうに、唸るやうに、助けてくれといふのであつた。

私は衣囊を残らず捜しはじめた……財布もない、時計もない、手帕すらもない……何一つ持合はしては來なかつたのだ。

けれど、乞食はまだ待つてゐる……さしのべた手は弱々しげにふるへ、をのいてゐた。

すつかり困つてしまつて、いらいらした私は、この穢い、ふるへる手をしつかりと握つた……『ねえ、君、勘忍しておくれ、ぼくは何にも持合はしてゐないんだよ。』

乞食は私に血走つた眼をむけ、蒼い唇に笑みを含んで、彼の方でもぎゆつと私の冷えてゐた指を握り締めた。

『まあ、そんなことを』と彼は囁いた、『勿體ねいでき、これもまた、施物でござえますだ。』

私もまたこの兄弟から施しを享けたことを知つたのである。

愚かしき者の審判を聴け……

プウシキン

『愚かしき者の審判を聴け』……卿はつねに眞實を語つた、ああ、偉大なるわが詩人よ、卿はいまもまた眞實を語つたのである。

『愚かしき者と審判の、衆人の嗤ひと』……誰か、この二つを経験しなかつた者があらう。

これらはみな人の堪へ得ることであり……また堪へなければならぬことである。敢て輕蔑することの能き者は、輕蔑するがよいのだ。

然し一層いたいたしく胸をうつつ打撃があるのだ……ある人は能き得る限りのことをした、懸命に、心を打ちこんで忠實に働いた……すると正直な人は苦

しげに顔をそむけ、正直な者の顔は、彼の名を聞くと憤怒に燃えあがる。『退け！ 向うへ行け！』正直な者の聲は彼に向つて叫ぶのである、『お前は俺たちには用がない、お前の仕事にも用がない、お前は俺たちの住處を汚す……、お前は俺たちを識らない、俺たちを理解しない、お前は俺たちの敵だ！』

かかる時に、この人はどうしたらよいのであらう。仕事をつづけるがよい、自己を辯明しようとしないうがよい……ましてやより公平な評價を豫期することなどはしないがよいのだ。

嘗て農夫たちは麵麩の代用品であり、貧しい者の常食物である馬鈴薯を齎した旅の者を呪つた……彼等は、彼等にさしのべた手から貴い贈物をたたき落とし、泥の中に投げ込み、足で踏みにじつた。

いま彼等はそれを食べて暮してゐる。しかも恩恵を與へてくれた者の名を知りもしない。

それでよいのだ。彼等にとつて彼の名が何であらう。彼はたとひ名はあらはれずとも、彼等を饑餓から救つてゐるのである。

我々は、我々の齎すものが、真に有用な食物であるやうにとただそれだけを心がけて行かう。

愛する人たちの唇にのぼる不當な辱罵はつらい……しかしそれもまた堪へられる。

『俺を打て！ 然し、心をとめて聽いてくれ！』と雅典の將はスパルタ人に向つていつた。

『俺を打て！ 然し、健かに、満腹してゐるがいい！』と我々はいはなければならぬ。

處生法

『若し君が敵手をひどく困らせ、傷けてやらうとでも思ふなら』と、ある古狸が私にいつた、『君は自分で有つてゐると思ふ缺點だとか、悪癖を數へあげて、敵手を非難してやるがいいよ、大いに憤慨して、非難するんだ。』

まづさうすれば、君はその悪癖を有つてないと相手の奴に思はせるだらう。次には、君の憤慨が本物にもなるし、君は自分の良心の苛責を利用することもできる。若しも、君が、たとへば假に變節者であつたとしたら、相手に信念がないといつて非難してやり給へ。

また若し、奴隷根性をもつてゐたら、口をきはめて、そいつを奴隷だ……文明の、歐羅巴の、社會主義の奴隷だといつて、けなしてやり給へ。』

『反奴隷主義の奴隷だ、ともいへるでせうね。』と私は氣を引いてみた。

『さうもいへるね。』と、古狸は私の言葉を引取つた。

一人のまだうら若い男が都の街を跳ねるやうに疾つてゆく。彼の動作は喜びに充ち、いきいきして、眼は輝き、唇は微笑み、昂奮した顔はこちよく紅らんでゐる……。彼は渾身これ満足と喜びに充ちあふれてゐるのだ。

彼の身の上何が起つたのか。遺産が手に入つたのか。陞進したのか。逢引に急いでゐるのか。それともただ——うまい朝飯を喫べて——健康の感じ、満腹の感じが、からだ中に、たのしく沸き返つてゐたのか。彼の頸に、早くも

満足してゐる人

卿の美しい八稜十字章をかけてやつたといふ譯でもなからう、波蘭の王、スタニラスよ。

否、彼は知合ひに對して讒言を捏造し、それを一所懸命にひろめ歩き、その、同じ讒言を、他の知合ひから聽いて……彼自身もそれを信じてしまつたのである。

ああ、この愛すべき前途有望の青年は、この瞬間に於て、いかばかり満足し、いかばかり善良ですらもあつたらう！

この世の終末^{をばり}

夢

私は露西亞の、どこか、人里遠く離れたところにある、簡素な村家^{むらかや}にゐるやうに思はれた。

部屋は大きく、低く、窓が三つついてゐて、壁は白く塗られ、家具ひとつなかつた。家の前には荒涼たる平原があり、次第に勾配がゆるやかになつて、遠くの方へ續いてゐた。灰色の、單調な空が、その上に寢帳^{たねの}のやうに垂れ下つてゐた。

私はひとりではない、部屋の中にはなほ十人ほどゐるのであつた。みな、あたりまへの人たちで、素樸な身なりをしてゐた。口をつぐみ、拔足をしてゐるかのやうに、しづかに行きつ戻りつしてゐる。互ひに避け合つてはゐるが、——みな一様に絶えず不安げな眸を見交はしてゐる。

誰ひとりとして、どうしてこの家へ來たのか、一緒にゐる人がどんな人たちなのか知らずにゐる。顔にはみな不安と喪心の色が見える、……誰もがつきつぎに窓のところへ近づいては、外から來る何ものかを待ちうけてゐるらしく、注意ぶかく、あたりを見廻してゐる。

やがて又ぶらぶらと行きつ戻りつしはじめる。

その中^{うち}を背の大きくない男の子がぐるぐるとめぐつてゐる、絶えず、この男の子は細い、一本調子な聲で、『お父ちゃん、怖いよう、』といつてゐる。この細い聲に私の胸もむかつて來る——私もまた怖しくなつて來る、……何が怖しいのか、自分でもわからない、ただ大きな、大きな禍難^{わざはひ}が、次第次第に近づいて來ることを感ずるだけである。

男の子は、やめたかと思ふと、また哭き出す。ああ、どうかして、ここから逃げ出したい。何て、息苦しいんだらう。何て、懶いことだらう。何て重苦しいことだらう……、けれどどうしても逃げ出すことができないのだ。

この空はまるで死衣^{しかせぬ}のやうだ。それに風もないし……空氣は死んでしまつ



たのか、どうしたのか。

急に男の子は窓に駆け寄り、例の哀れげな聲で叫んだ、『あれ、あれ、地面が陥つこちた。』

『え？ 陥ちたつて？』 たしかに、今までは、家の前に平原があつた筈なのに、いま、家は怖い山の頂に立つてゐるのだ。地平線は落ちこみ、低く降つて、家のすぐそばから殆んど垂直な、まるで切りとつたやうな、黒く險阻になつてゐる。私たちはみな窓のところに押し寄せた……恐怖のあまり心臓は凍つてしまふ。『ほら、あれよ……あれよ、』と私のわきにゐた者が囁く。

見れば、はるか遠い地極に沿うて、何ものかが動き出した、何かしら、小さな、圓味をおびた丘のやうなものが、起伏しはじめたのである。

『これは——海だ。』と私たちには同時に考へられた。『すぐに我々を呑んでしまふだらう……しかし、どうしてこんなに高く、わき騰つて來られるものか。こんな險阻の上に乗るまで。』

しかも海はいよいよ氾濫する、氾濫する……今は、遠くにきれぎれの丘が

起伏してゐるのではないのだ……連り續く、奇しげな一脈の波が、見渡す限りの地平線をすつかり抱きこんでゐるのだ。

波は私たちを目がけて奔騰する、奔騰する。波は凍みつくばかりに寒い颪風に乗つてやつて來る、波は地獄の闇のやうに渦巻く。周囲のあらゆるものは慄へ出した——この襲ひよる怒濤のうちには轟聲がある、雷鳴がある、幾千の咽喉から洩れる鐵のやうな號叫がある……

ああ、何といふ吼號、慟哭であらう。これは大地そのものが恐怖のあまり遂に悲鳴をあげたのだ。……

大地の終末！ 一切の終末！

男の子はもう一度、泣き聲を出した……私は仲間のものにすがりつかうとしてゐた——けれど、私たちはみな、墨汁のやうに眞黒い、氷に充ちた、轟く波に押し潰され、葬られ、取りさらはれて居るのであつた。

暗黒！ 永遠の暗黒！

呼吸もたえだえに、私は眼を覺ました。

「幾年も前のことである、ペテルブルグに住んでゐた時分、私は辻馬車屋を雇ふやうなことがあると、きつとその男と話をしたものであつた。

わけても近郷の貧しい百姓で、自分の暮しをつけたり、旦那への年貢を儲けるつもりで、枯草色に塗つた櫓と、やくざな駄馬とをひつさげて、都へ來てゐる夜の馬車屋と話をするのが好きであつた。

さて、ある時のこと、私はさうした馬車屋を雇つた……二十歳くらゐの若者で、背の高い、頑丈な、いい若い衆であつた。碧い眼と、紅い頬と。亞麻いろの髪は、目深にかぶつた、つぎはぎの帽子の下から小さな渦を巻いて、はみ出してゐた。こんなに、がつしりした肩の上に、どうしてかういふぼろぼろの窄ちぢ小さな上衣うはぎが着られたのだらう。

しかし、馬車屋の、きれいな、髯のない顔は物悲しく、陰氣さうに見うけ

られた。

私は彼と話をした。彼の聲にも哀愁がこもつてゐた。

『君、どうしたんだい。』と私は訊いた、『どうして鬱ふさいでるんだ。何か不仕合せなことでもあるのか。』

若者はすぐには答へなかつた。

『あるんですが、旦那、あるんですが。』

と、彼はたうとう呟いた、『いつそ、死んだ方がましな位くらゐなことなんです。女房が死んぢまひやして。』

『可愛がつてたんだらうねえ……そのお内婦さんを。』

若者は私の方を向かなかつた、ただ心もち、頭を下げたばかりであつた。

『可愛がりましたとも、旦那、八ヶ月にもなりますが……どうにも忘れらんねえで。しよつちゆう、かきむしられるやうな思ひでさ、全く。何だつて、また死ぬやうなことになつたんだか、若い身空で！ 丈夫だつたのに。たつた一日で虎列拉にやられちめえやがつて。』

『いいお内婦さんだつたらうね?』

『ああ、旦那!』 哀れな男は深く溜息をついた、『一緒にどんなに二人は仲よく暮しましたか。それに、わしのぬえ留守に逝つちまつたんでさ、わしは此處で女房が埋められたつて聞くと、ちぎに村へ駈けつきました。家に着いた時はもう眞夜中過ぎでした。小舎へ入つて、部屋の眞中へ立ちどまつて、そつと「マァシャ、おいマァシャ!」つて呼んで見ましたが、ただ蟋蟀が鳴いてるばかり……そこでわしは泣き出して、土間にべつたりと坐りこんで、掌で地べたを叩いたんでがす!』この胸愆な土め! てめえは女房を貪食ひやがつたな、さあ、俺も食つてくれ! ああ、マァシャ!』

『マァシャ!』と彼は急に沈んだ聲で附け加へた。そして手綱を持つたなり、手袋で眼から出る涙をおし拭ひ、涙を振つて、肩をゆすぶり、もう一言もいはなかつた。私は櫓から下りる時、酒手に五錢玉をやつた。彼は両手で帽子をとつて、丁寧に御儀をし、一月のひどい寒さに、灰色の霧のかかつた、人氣もない街路の、白い卓布のやうに降り積つた雪の上を、徐かに歩いて行つた。

馬鹿もの

馬鹿ものがあつた。

永い間、彼は何不足なく暮してゐた、ところが、追々、彼の耳に、自分が到るところで馬鹿ものだといふ評判の立つてゐることが、傳はつて來はじめた。馬鹿ものは、どきまぎして、どうしたらこの面白くない噂を絶やしてしまへるだらうかと思案し出した。

遂に彼の鈍い頭腦に、ふとした思ひつきが浮んだ……そこで躊躇せず、早速それを實行して見た。

街で一人の知合ひが彼に出逢つて、さる有名な畫家を賞めてかかつた……『だがねえ』と馬鹿ものは叫んだ、『その畫家はもう疾うにすたりものになつてるんだ……君はそれを知らんのかえ? まさか、君がさうだとは思はなかつたよ……、君は時勢おくれな人間だねえ。』

知合ひはびつくりして、直ぐに馬鹿ものに同意してしまつた。

『今日は僕はとてもすばらしい本を読んだよ！』と別の知合ひが彼にいつた。『だがねえ！』と馬鹿ものは叫んだ。『君は、それで、よく恥かしくないねえ。あの本は何の役にも立たないもんだよ、誰も彼ももう投げちやつたもんなんだ、君はそれを知らんのかえ？ 君は時勢おくれだなあ』

この知合ひも驚いて——馬鹿ものに同意してしまつた。

『僕の友だちの**は何てすばらしい人間なんだらう、』と三人目の知り合ひが馬鹿ものにいつた。『いや實際、氣品のある男だよ！』

『だがねえ』、と馬鹿ものは叫んだ『あの**は有名な破廉恥漢だよ、あいつは、親類といふ親類から捲き上げたんだ。それを知らねえものは一人だつてないんだ。君は、時勢おくれだねえ！』三番目の知合ひもまた驚いて、馬鹿ものに同意して、その友だちから離れてしまつた。

かうして馬鹿もの前で誰であらうと何事であらうと、賞めた場合には、悉く例のやうに應酬するのであつた。おまけに時によると罵倒して、かう附け

加へるのだつた。『ぢあ、君はまだ權威を信じてるのかい？』

『たちの悪い奴だ！ 苦々しい奴だ、』と彼の知合ひたちは、馬鹿ものこゝとを語るやうになつた。『しかし何ていふ頭腦だらう！』

『それに何ていふ巧辯だらう！』と他の者は附け加へるのであつた。『さうだ、たしかに天才だ！』

おしまひには、或る新聞の發行者が彼に批評欄を引受けてくれと申し出た。やがて、馬鹿ものは、例の態度、例の表白を少しも變へないで、あらゆること、あらゆる人を批評するやうになつた。

今や、嘗ては權威に對つて抗辯した彼が、自ら權威となつたのである……青年は彼を崇拜し、彼を畏懼れてゐる。

あはれな青年たちには、さうすること以外に、何をする事が能きるであらう？ 抑々人は何人をも崇拜してはならぬものである……しかし、この場合には、若し崇拜しないとすれば、時勢おくれになつてしまふのだ！

臆病もの間には馬鹿ものがのさばつてゐるのである。

東方傳奇

誰かバグダッドに宇宙の太陽、偉大なるジャッファルを知らないものがあるであらうか？

何十年もの昔のことである、或る時、未だ青年のジャッファルはバグダッドの郊外をぶらついてゐた。

ふと、嘎れた呼び聲が耳について來た。誰かが必死になつて救ひを求めてゐたのである。

ジャッファルは同年輩のものの間でも、優れて思慮分別の備はつてゐる男であつたが、彼はまた慈悲心に富んで——自らその膂力ちからを恃んでゐた。

彼が聲する方へと駈けつけて行つて見ると、老耄れた老人が、二人の追刺さしに市の城壁に壓しつけられてゐるのであつた。

ジャッファルは佩劍やいばを抜いて、惡漢に攻め寄り、一人を殺し、一人を追ひ拂つた。

かうして難を免れた老人は、救ひ出してくれた人の足もとに跪いて、その着物の裾に接吻くちづけして叫んだ、『勇ましい若い衆、あなたのお志はきつとお報い致しますぞ。見かけこそ儂は見すばらしい乞食ぢやが、それは見かけだけのこと。儂はただの人間ぢあない。明日の朝早く、中央市場へお出なさい。噴水ふんすいのところまで待つてませう。ゆめゆめ儂のいふことを疑ひなさるな。』

ジャッファルは考へた、『この人は成程、見かけは乞食だ。然しいろんな事があるものだ。やつて見ないことにや、はじまらぬ。』そこで彼は答へた、『かしこまりました、御老人、参りませう。』

老人は彼の顔をぢつと見た。そして遠ざかつて行つた。

翌る朝、ジャッファルは明るくなるかならないうちに、市場を指して出かけて行つた。老人は早くも噴水ふんすいの大理石の水盤に肘をついて、彼を待ちうけてゐた。

彼は口を噤んだまま、ジャッファルの手を取つて、高い壁を繞らした小さな庭園の中へと連れて行つた。

庭園のちやうど真中の緑の芝生の上には、一本の奇妙な樹が生えてゐた。それは糸杉に似通つてゐた、ただその葉だけは瑠璃いろをしてゐた。

三つの果實——三つの林檎が、上の方へ曲つてゐる細い枝に垂れさがつてゐた。一つは中位の大きさで、小判形に長く、乳白色をしてゐた。次のは大きく、圓く、鮮紅色であつた。三つ目のは小さく、皺ばんで、黄色味がかつてゐた。

風もないのに、樹は力なげにそよいでゐるばかりであつた。まるで硝子でもつくつたもののやうに鋭く、悲しげに鳴つてゐた。それは、ジャッファルの近づいて來たのを感じてゐるかのやうに思はれた。

『お若いの！』と老人は言つた、『この林檎のうち、どれか好きなのを採りなされ、さうぢや、若し白いのを採つて食べれば、あなたは人間中で誰よりも賢くなれる、紅いのを採つて食べれば、猶太人ロスチャイルドのやうに金持に

なれる。まつた、黄いろいのを採つて食べると、お婆さん方に好かれるといふものぢや。さあ、決めなされ！……ぐづぐづしないがいい。一時間すれば、林檎は凋んで、ひとりで是の樹も、聲もない地の底に沈んでしまふのぢや。』

ジャッファルは項垂れて——考へ込んだ。『さて、どうしたもんだらう？』と、彼は自分自身に諮るかのやうに、低い聲で言つた、『餘り賢くなると、きつと生きてゐるのが厭やになるだらう。人一倍、金持になれば、人は皆そねむことだらう。一そのこと三つ目の皺ばんだ林檎を採つて食べた方がましだ！』

そこで彼は、その通りにした。すると老人は齒の無い口で笑ひ出して、かう言ふのであつた、『利發な若い衆だ！ あんたは良いやつを選んだぞ！ あんたに白い林檎が何の役に立つものか？ 見ての通り、あんたはソロモンよりも賢いんだ。それに紅い林檎だつて用はあるまい……それが無くつたつて、金持にやなれるんだ。尤もあんたの富だけを嫉むやつもあるまいに。』

『御老人、聞かして下さい。』と、ジャッファルは身ぶるひしながら言つた、『祝福せられたる我等が回教主の尊き御母君は、何處にいらつしやるのでござ

いませう。』

老人は恭々しく禮をして、若ものに道を教へてやつた。

誰かバグダッドに、宇宙の太陽、偉大なる、有名なるジャッファルを知らな
いものがあるであらう。

二つの四行詩

嘗て一つの町があつた、その住民たちは詩を熱愛するのあまり、何週間
も新しい美しい詩が現はれないで過ぎると、かやうな詩の不作を、公の災禍と
見做したほどであつた。

かやうな時には、彼等は最も醜い着物を着て、頭に灰をふりかけ、群をな
して廣場に集り、涙を流して、彼等を見すてた詩神に酷く苦情を並べるのであ
つた。

或る、かうした不幸な日に若い詩人のジュニウスは、悲嘆に暮れた群集の
押し合ひへし合ひしてゐる廣場へやつて來た。

彼は急ぎ足で特に設けられた高壇に登り、詩を朗讀したいとの合圖をした。
係の者は直ちに笏杖を振りだした、『しつ！ 謹聽！』と、彼等は聲高く
叫んだ。群集は片唾を呑んで静まりかへつた。

『友よ！同志よ！』とジュニアスは高い、しかも、あまりしつかりしない
聲ではじめた……

友よ！同志よ！詩を愛するものよ！

階調あるもの、美しきもの、すべてを崇むる者よ！

しまらくも暗き憂愁に心を悩まされることなからむことを！

待ちあぐみたる時の来りて、……光は闇を逐ひやらむ。

ジュニアスは口を噤んだ、……すると彼に應へて、廣場の四方八方から、
ざわめきや、口笛や哄笑がわきあがつた。

彼に對つた顔といふ顔は、憤激に燃え、眼といふ眼は憤怒にかがやき、手
といふ手は舉げられて、威嚇の拳を握つてゐた。

『こんな詩でおどかさうつて考へたのか！』と、憤怒の聲が怒號した、『高
壇からあのくだらないへぼ詩人を引きずり下せ！馬鹿者を引つこませろ！こ
のたはけ者を腐れ林檎と腐れ玉子でやつつけろ！おい、石を取つてくれ！
石をこつちへ！』

ジュニアスは獨樂のやうにすばやく高壇を滑り落ちて行つた……けれど自
分の家へまだ辿り着かないうちに、熱狂した拍手喝采や讚美の聲や、叫びごゑ
を耳にした。

疑惑の念にみたされて、ジュニアスは、人に氣づかれないやうに氣をつけ
て（荒れ狂つた獸を怒らすのは危険なので）、廣場へと引きかへして來た。

さて、彼は何を見たであらう？

群集の上高く、彼等の肩の上に、黄金の平たい楯に乗つて、紫袍をまとひ、
うちなびく髪に月桂冠をいただいて立つてゐたのは、まぎれもない彼の競争者、
若い詩人のデュリアスであつたのだ……周囲の群集は叫び立てた、『萬歳！
萬歳！不滅のデュリアス萬歳！彼こそ我々の悲しみを、我々の大いなる苦惱
をやはらげてくれたのだ！彼は蜜よりも甘く、鏡鉞よりも響よく、薔薇の花
より香はしく、蒼穹よりも清らかな詩を與へてくれたのだ！彼を華々しく連
れて行つて、秀靈な頭に香のやはらかな波を注ぎかけ、棕梠の小枝でしづかに
彼の額を煽ぎ、足もとには亞刺比亞のあらゆる没薬の香りをふり撒いてやるが

「さあ、もう一言ぬかして見ろ、」と市民は遮つた、「俺はみんなを喚ぶぞ！
さうしたら、手前を八つ裂にしちやふだらう！」

ジュニアスは賢明にも黙つてしまつた。すると彼の話を聞いてゐた白髪の

民のお方、私に聞かして下さい！ チュリアスは一體、どんな詩であなた方を
喜ばしたんでせう！ 残念ながら詩を読んだ時私は廣場に居合はさなかつたん
です。忘れてなかつたら、もう一度、聞かして下さい、どうぞお願ひです。』
『あんな詩が、どうして忘られるもんですか？』と、訊ねられた男は力ん
で答へた、『僕をどんな人間だと思つたんですか？ まあ聞いて、喜びなさい、
僕等と一緒に！』

「詩を愛するものよ！」と神のやうなチュリアスは始めたのさ……

詩を愛するものよ、同志よ、友よ、

階調あり、調べ妙なる、優雅なるもの、すべてを崇むるものよ！

しまらくの重き悲嘆に心を悩まざることのなからむことを！

待ちあぐみたる時の來りて、晝は夜をば逐ひやらむ！

どうです？』

『え、糞つ！』とジュニアスは叫んだ、『そりや、僕の詩ぢやないか！
きつと、チュリアスは僕が詩を読んだ時、群集の中に居つたに違ひない、奴は
それを聴いてて、もう勿論、よくはならないが、言ひまはしを少しばかり變へ
て、繰返したんだ！』

『ははあ、それで君の正體がわかつた……君はジュニアスだな！』と、彼の
呼びとめた市民は眉を擡めて言つた、『嫉妬深い奴だな、でなきや大馬鹿だ！
……さもない奴、まあちよいと考へて見ろ！ チュリアスの方がどんなに高尙
にいつたか、「晝は夜をば逐ひやらむ！」君の方は何てえたは言だ、「光は暗
を逐ひやらむ！」だなんて!? どんな光がだ!? どんな闇をだ!?』

『けどそりや全く同じぢやありませんか？』とジュニアスは言ひはじめた
のである……

『さあ、もう一言ぬかして見ろ、』と市民は遮つた、「俺はみんなを喚ぶぞ！
さうしたら、手前を八つ裂にしちやふだらう！」

ジュニアスは賢明にも黙つてしまつた。すると彼の話を聞いてゐた白髪の

老人が、あはれな詩人の所へやつて来て、彼の肩に手を置いて、口をひらいた。
『ジュニアス—君は自分自身のものを歌つた、けれど時機に合はなかつた、
彼は自分自身のものを歌つたわけではない——しかも時機に合つてゐた。だから
彼はよかつたのだ！君には、その代りに自分自身の良心の慰安が残つてゐ
る筈だ。』

然し、良心が全力を傾けて、——實をいへば、極めて覺束なかつたが——
わきへ押しつけられてゐるジュニアスを慰めてゐる時に——はるかに遠く、狂
喜の拍手喝采を浴びて誇りかな太陽の金粉のやうな光に包まれ、ゆたかな香の
けぶりの流れる中に紫金の光を放つ月桂冠を戴いて、王位に登る皇帝のやうに、
重々しげに、しづしづと、誇らしげに身を正したデュリアスの姿は動いて行つ
た……棕櫚の長い枝は、つぎつぎに彼の前に傾けられた、恰も彼に魅了されて
ゐる市民の心を充し、絶えず新しくわきあがつて来る讃仰の情を、靜かにあげ
られ、慎ましやかに下ろされる棕櫚の枝があらはしてでもゐるかのやうに！



雀

私は獵から歸つて、庭園の並木道を歩いてゐた。すると、私の前の方へ、犬が驅けて行つた。

ふと、犬は刻み足になつて、恰も野禽を嗅ぎつけたかのやうに忍び足し始めるのであつた。

私は並木道づたひに、ずつと眼を配つて見た、そして、まだ嘴のあたりの黄いろい、頭に絨毛ふさけの生えた一羽の仔雀を見つけた。仔雀は巢から落ちて、(風はひどく並木道の白樺をゆすぶつてゐた) やつと生え出したばかりの翼を、たよりなげに擴げたまま、ぢつとしてゐた。

犬は靜かに仔雀に近づいて行つた、急に傍らの樹から、すばやく胸の黒い親雀が、飛石のやうに犬の鼻先へ飛び下りて來た。絶望の餘り、全身、羽毛を逆立てしどけなく、哀れげに啼き叫びながら、犬の大きな齒を覗かせて、開い

た口に二度ほども飛びかかつた。

親雀は仔雀を助けようと、身をもつて庇ふのであつた、けれど小さな全身が恐怖にわななき、聲は亂れ、嘔れて、たうとう氣絶してしまつた、彼は身を犠牲にしたのである。

彼の眼には、犬がどんなにか大きな怪物に見えたにちがひない！ しかもなほ彼は安らかな枝の上に止まつてゐることが能きなかつたのである……意志よりも強い愛の力が枝から飛び下りさせたのであつた。

私のトレゾル(犬の名)は、ぢつと立どまつて、後退りした。……犬もまたこの力を認めたものと見える。

私は急いで、うろたへてゐた犬を呼び戻し、敬虔の念にうたれながら立去つた。さうだ、笑つてはいけない。私はあの小さな悲壯な小鳥に對して、小鳥の愛の衝動に對して、尊敬の念を懷いたのである。

私は考へた、愛は死よりも、死の恐怖よりも強いと。それによつてのみ、愛によつてのみ、生活は保たれ、おし進められて行くものであると。

髑 髏

豪華な、燦爛たる廣間、紳士淑女、大勢。

顔といふ顔は生氣にあふれ談話ははずんでゐる……ある有名な歌女のこと
が賑やかな話題に上つてゐる。彼等は神のやうな女、不朽の女だと讃へてゐる
……ああ、昨日は何てすばらしく、最後の顫音をやつてのけたことであらう！
すると、不意に——魔法使の笏杖の指圖によるかのやうに——誰も頭か
ら、誰も顔から、薄い皮膚が滑り落ちて、——忽ちにして蒼白い髑髏があら
はれ、あらはになつた齒齶や頬骨が青味を帯びた錫のやうにきらめいた。

恐怖の念を懐きながら、私は齒齶や頬骨の動くのを見た、——洋燈や蠟燭

の光に、節くれだつた骨の球が、かがやきながらぐるぐる廻はるのを、またそ
の球のなかに別の一層小さな球の——何の意味もない眼の球の廻はるのを見た。
私は敢へて自分の顔に觸れまいとし、鏡の中に自分の姿を覗くまいとして
ゐた。

しかも、髑髏は、やはりぐるぐる廻つてゐた……。そして前のやうな騒ぎ
をして、剥き出された齒の間から、紅い端布のやうに、舌をちらちらと覗かせ
、早口に、ぼんやりと、あの不朽の……さうだ、あの不朽の歌女はなんてす
ばらしく、なんて及びもつかぬばかりに、最後の顫音をやつてのけたのだらう
と、語つてゐるのであつた。

雑役夫と白い手の人

會話

雑役夫

何だつて手前は俺等んとこへ出しやばりやがるんだ。何が用があるんだ。お前は俺等の仲間ぢやねえんだ……あつちへ行け！

白い手の人

兄弟、俺あ、君等の仲間なんだよ。

雑役夫

とんでもねえ！ 仲間だつて！ 何をぬかすんだ！ まあ、俺の手を見ろ！ どうだ、穢ねえだらう。肥料の匂ひだの、煙脂の匂ひがすらあね——ところが、お前の手は眞白だ。一體、何の匂ひがする？

白い手の人

(手を差出して) 嗅いで見てくれ。

雑役夫

(その手を嗅いで) こりや何事だ？ 鐵みてえな匂ひがすら。

60

白い手の人

うん、鐵なんだ。俺はまる六年といふもの、手錠箠めてたんだ。

雑役夫

そりやまた何うして？

白い手の人

なあに、君らの幸福を案じたのさ、君たち、當り前の、なんにも知らねえ人間を自由にしてやりていと思つて、君たちを壓迫してる奴等に逆つて、謀反をしたんだ、……すると奴ども、俺をぶち込みやがったのさ。

雑役夫

ぶち込みやがったつて？ またよく臆面もなく謀反ができたもんだな！

／＼(二年の後)

同じ雑役夫

(別の雑役夫に向つて) おうい、ピョートル、一昨年をの夏、手前てめえと話をした生白い手の奴を覚えてるかえ？

別の雑役夫

覚えてら、それがどうした？

61

第一の雑役夫 あのなら、あの野郎が今日、首を絞められるつてことよ、さういふお布令だ。

第二の雑役夫 やつぱり謀反をしたんだな？

第一の雑役夫 謀反をしたんだ、やつぱり。

第二の雑役夫 成程……ところで、おい、ドミトリイ、野郎を絞める繩の切

れつ端は取れめえかな？ 何でもそいつを持つてると、家へどゑれい福が舞ひこむつていふぜ。

第一の雑役夫 そりやあ、全くだ。ひとつやつて見なくちやなんねえ、なあ、ピョートル。

薔 薇

八月の末つ方、……秋はもう近づいてゐた。太陽は沈んだ。はげしい驟雨が、雷鳴も電光も伴はず、この曠野を今しも過ぎて行つたばかりである。

家の前の庭園は、夕映えの燃え明る光と、あふれるやうな雨水にすつかり浸されて、燃えかがやき、うち煙つてゐた。

女は客間の卓子に向ひ、深い思ひに耽りながら、半ば開かれた扉から庭園の方を眺めてゐた。

私はその時、女の心に思つてゐることをよく知つてゐた、女が暫しの間ではあつたが烈しい苦闘ののち、いまこの刹那に、最早たうてい制御することの能きない或る感情に身を任せてゐることをよく知つてゐたのである。

ふと、女は立上つて、足早に、庭園に出て行つて、見えなくなつてしまつた。一時間経ち……また一時間たつた。女は歸つて來なかつた。

そこで、私は立上つて、戸外きよに出て、女が通つて行つた——私がたしかにさうだと考へてゐた——並木道を進んで行つた。

あたりは、すつかり暗くなつて、もう夜になつてゐた。けれど道の濕つた砂の上には、ひろがる夕靄の中にさへも、くつきりと紅らむ、圓味を帯びたものが見うけられた。

私は身を屈めた。それは咲き立ての、生々いした薔薇の花であつた。まぎれもない二時間まへに、女の胸に見たあの薔薇の花であつた。

私はそつと泥濘ぬかるみに落ちてゐた花を拾ひ上げて、客間に引返し、それを女の椅子の前の卓子つくまのうへに置いた。

すると、たうとう女も歸つて來た。軽い足どりで部屋をぐるりとめぐつて、卓子つくまに向つて腰をおろした。

女の顔は一そう蒼く、また一そう生々してゐた。嬉しさにどぎまぎして、伏目がちに、いくらか前よりも小さく見える眼は、さつとあたりに注がれた。

女は薔薇の花を見ると取上げて、揉みくしゃになつて、汚れた花びらを眺

め、私を眺めるのであつた、その眼は急にちつと据わり、涙に耀いた。

『何をあなたは泣くのです?』と私は訊いた。

『あの、……この薔薇をごらんさないな、こんなになつてしまいましたわ。』そこで私は意味深長なことを言はうと考へた。

『あなたの涙は、その泥を洗ひませう。』と、私は意味ありげな言ひまはしで言つた。

『涙は洗ひはしませんわ、涙は焼いちまひますわ。』と、女はかう答へた、煖爐の方をふり向きながら。そして消えかかつてゐる焰の中に薔薇の花を投げこんだ。

『火は涙よりもよく焼いちまひますわね。』

と、彼女はきつぱりと叫んだ、まだ涙に輝いてゐる美しい眼は、憚ることなく、幸福さうに笑ふのであつた。

私は女もまた、すつかり焼き滅ばされてゐたのだといふことを悟つたのである。

ユー・ペー・ウレフスカヤの思ひ出

荒廢に歸した勃加利の小村、急に野戰病院にされた朽ちはてた納屋の檐の下、惡臭を放つ濕つた藁のうへに、二週間餘りといふもの、彼女は空扶斯で死にかかつてゐたのである。

彼女は人事不省であつた、一人の醫師も彼女を見舞ひはしなかつた、まだ彼女が立ちまはりのできる間に、看護してやつた病兵たちが、こはれた土瓶の破片に入れた水のいく滴かを乾いた彼女の唇にすすめようとして、毒氣の染みついた臥所から代はる代はる起き上るのであつた。

彼女は若く、美しかつた。上流社會に知られて、貴顯紳士にすらも喧傳されてゐた。婦人たちは彼女をそねみ、男子たちは媚び諂つてゐた、……二三人のものは、ひそかに深く彼女を戀してゐた。人生は彼女に微笑みかけてゐた、けれど涙よりも慘めな微笑があるのである。

優しい、素直な心……このやうな力、このやうな犠牲心！ 助けを必要とするものを助けること……彼女はこれ以外に幸福といふものを知らなかつた、知りもしなかつたし、味はひもしなかつたのである。あらゆるその他の幸福は、彼女の前を素通りして行つた。然も疾くから、かうしたことにも馴れ従ひ、かき消すことの能きない信仰の熱に燃えて、隣人のために身を獻げたのであつた。いかなる祕寶が、彼女の胸深く、彼女の奥底に藏されてあつたか、誰一人として絶えて知るものがなかつた。今も、もとより誰一人知るものはないであらう。さて、それが何になるであらう。犠牲は獻げられ……事業は完うされたのである。

とはいへ、彼女の死骸にさへも誰一人、感謝の言葉を捧げなかつたことを思へば、傷ましい思ひがする。彼女自身はあらゆる感謝の言葉を恥ぢらひもし、斥けてもゐたのではあつたが。

希はくは、私が敢へて墓の上に置くおくれればせの花をば、うるはしき幽魂のことがめざらむことを！

最後の邂逅

嘗て私たちは極めて親しい、隔てのない友達であつた……けれど面白くない事があつて、私たちは怨敵同志となつて別れてしまつた。

幾年かは過ぎた。ある時、彼の住んでゐる町へ来て、私は彼が病篤く、私に會ひたがつてゐるといふことを耳にした。

私は彼の許を訪れて、彼の部屋に入つた……二人の視線は落合つた。

私はやつと彼の顔がわかつたのであつた。ああ！どんな病氣が彼をかういふ風にしてしまつたのであらう！

黄色く、やせ衰へ、頭はすつかり禿げてしまひ、白髯を細々とのばした彼は、一枚の特に仕立てた襦袢じゆばんを着て坐つてゐた……彼は極めて軽い着物の重味にすらも堪へられなかつたのである。彼は嚙み減らされたやうにひどく痩せた手を、劇しく私に差しのべて、辛うじて二言三言、わけのわからぬことを呟い

た——それは挨拶であつたのか、それとも非難であつたのか——誰が知るであらう。疲憊した胸は波うち——血走つた眼の、縮んだ瞳には、二滴しつぷくの、ほんのしるしばかりの、いたいたしい涙がこぼれてゐた。

私はがつかりした……。私は傍らの椅子に腰をかけて、おそろしい、見苦しい姿を前にして、心ならずも眼を落しながら、同じやうに手をさし出した。けれど私の手を握つたのは彼の手ではないやうに思はれた。

二人の間には脊の高い、物ごしの静かな、白い女が坐つてゐるやうに思はれた。長い掛布かほが、彼女を頭から爪先まで纏つつんでゐる。その深い、蒼ざめた眼は、どこを見てゐるともなく、蒼白い、引締つた唇は一言も物をいはない……。この女が二人の手を結び合はしたのである……この女が二人を永遠に和解させたのである。

さうだ……。死が私たちを和解させたのであつた。

おとづれ

私は開け放した窓のほとりに坐つてゐた……。朝、五月一日の朝まだきである。

曙の光は未だあらはれてはゐなかつた、けれど、もう、暗い、温かな夜は白んで、うそ寒くなつてゐた。

霧はあがらず、そよとの風も吹かず、あらゆるものは、ただ一樣に静まりかへつてゐた……。しかも、やがて眼覺めて來ることが感じられた。稀薄な空氣に、はげしい露じめりの匂ひがしてゐた。

ふと、開け放つた窓から、大きな鳥が軽い羽音をたてて、私の部屋に飛び込んで來た。

私は身ぶるひして、ちつと眼をこらした、……。それは鳥ではなかつた、身にびつたりついた、長い、裾に行くにしたがつて波のやうにやはらかな着物を

着た、翼のある小さな女であつた。

彼女はすつかり灰色で、眞珠のやうな色をしてゐた。ただ翼の内側ばかりが、咲きそめた薔薇の葩のやはらかな紅を帯びてゐた。鈴蘭の花冕は、圓い頭の、うち亂れた捲毛をおし包んでゐた、蝶の觸角のやうに、二つの孔雀の羽根が、美しい隆額の上に、たのしげに揺れてゐた。

彼女は天井の下を二度ほど飛びまはつた、極めて小さな顔は笑つてゐた。大きな、黒い明るい眼も笑つてゐた。

氣儘に飛んで、戯れるので、彼女の眼は金剛石のやうに輝いた。

彼女は曠野の花の長い莖を手にしてゐた、露西亞の人たちが、『王笏』と呼ぶもので、たしかに王杖に似通つてゐた。

すばやく私の上を飛びながら、彼女はその花で私の頭に觸つた。

私は彼女の方へ身を寄せた……。が、彼女はもう窓から飛び出して、また翔んで行つてしまつた……

庭園の紫丁香花の花の繁みの中では、珠數掛鳩が、一日のはじめの鳴聲を



たてて、彼女を迎へてゐた……彼女の消えたあたりに、乳白色の空は、しづかに紅らみはじめてゐた。

私は爾おんみを知つてゐる、空ソアラ想の女神よ！ 爾おんみはゆくりなくも私を訪れてくれた。爾おんみは若い詩人たちのもとへ飛び去つて行つた。

ああ、詩よ！ 青春よ！ 女性の、純潔の美よ、爾おんみたちは、ただひと時、私の前に、——早春の朝まだきに耀くだけである。

NECESSITAS—VIS—LIBERTAS

淺浮彫

鐵のやうな顔をして、ぢつと鈍い眼つきをした、脊の高い、骨ばつた老嫗が、大股に歩いて、枯枝のやうにやせがれた腕で、一人の女を自分の前に押出してゐる。

この女は——かなり大きな身體をして、力が強く、肥つてゐて、ヘラクレスのやうな筋肉をして、牡牛のやうな頸に、小ちやい頭が載つてゐて、——眼は見えず——やはり、小さい瘡せた女の兒を押出してゐる。

74

この女の兒だけは眼が見える、彼女は突張つて、うしろを振り返り、かほそい綺麗な手をふりあげてゐる。その生々した顔は、性急さと大膽さとをあらはしてゐる……彼女は従ふまいとしてゐる、彼女は押しやられる方へ行くまいとしてゐる……しかし兎に角、彼女は行かなければならないのである。

75

NECESSITAS—VIS—LIBERTAS

氣の向く方は——譯して見たまへ。

施物

ある大きな町の近くの、広い車道を、病みほうけた老人が歩いてゐた。

彼は歩きながらよろめくのであつた。彼の痩せ衰へた足は、絡んだり、引きずつたり、躓いたりしながら、他人の足でもあるかのやうに、重たげに、弱々しげに歩いて行くのであつた。着てゐた着物はぼろぼろになつてぶら下り、露出の頭は胸のうへに垂れてゐた、……彼は困憊し切つてゐたのである。

彼は、やがて路傍の石に腰をかけて、前屈みになつて、肘をついて、両手で顔を蔽つた。すると、曲げた指の間から涙がこぼれて、乾いた灰色の埃のうへに滴り落ちるのであつた。

彼は思ひ出した……

嘗て、自分が健康で、裕福であつたこと、また自分が健康を害ひ、富を他人のために、友達のために、また敵のために頷ち與へてしまつたことを思ひ出

したのである……。今は麴麴の一きれさへも持たなかつた。人といふ人は彼を見棄ててしまつてゐた、友達は敵より先きに見棄ててしまつてゐた。……果して彼は施しを乞ふまでに落魄しなければならぬのであらうか？ 彼の心の中

は、辛く、漸かしかつた。

涙はあふれあふれて、灰色の埃を點々と濡らすのであつた。

ふと、誰かが彼の名を呼んでゐるのを耳にした、彼は疲れきつた頭を擧げて、前に見知らぬ人のゐるのを見た。

その顔は落ちついて、どつしりしてゐたが、厳しくはなかつた。眼は輝いてゐるといふよりは、はつきりした眼であつた。この眼つきは彼を見抜くやうではあつたが、意地の悪いものではなかつた。

『君は財産をすつかり人に頷けてやつてしまつたんだね。』といつたのは抑揚のない聲であつた、『しかし、君は善いことをしたのを、まさか、情ながつてゐるんぢやあるまいね？』

『おやしませんよ。』と、老人は溜息をして答へた、『ただ御覽の通り私は

いま死にかかつてゐます。』

『若し世の中に君に向つて手をのべる乞食がゐなかつたら、』と、見知らぬ人は言ひ續けた、『君は誰にも善行を示してやれなかつたらうよ、善行を修業することが能きなかつた譯だね？』

老人はそれには答へずに、ぢつと考へ込んだ。

『まあ、爺さん、だから今はそんなに高ぶらないがいいよ。』と、見知らぬ人はまたいひ出した、『行つて手を出し給へ、君も他の氣だてのいい人たちに、みんなが善人だつていふことを實際によくあらはす機會を與へるんだね。』

老人は身ぶるひして、眼をあげた……もう見知らぬ人は消え去つてゐた——道の遠くの方から、通りがかりの人が見えて來た。

老人はその人の傍へ近づいて、手をさしのべた。この通りがかりの人は、いやな顔をして外れて行つて、何一つ呉れはしなかつた。

しかしまた後から一人やつて來た、——その人は老人にほんのわづかばかりの施しをして行つた。

かうして老人は貰つた錢で自分の麵麩を買つた——乞ひ求めて得た、いささかの食べ物が彼には身に泌みて美味く思はれた。そして心に何ひとつ恥づるところもなかつた。むしろ、反つて、靜かな歡喜が神の祝福のやうに、彼の心に浮ぶのであつた。

蟲

私たち二十人ばかりの者が、窓を開け放した大きな部屋に坐つてゐる夢を見た。

中には、女も子供も老人もゐた……誰もがかたりに評判な或る事柄について談してゐる……騒がしく、聞きとれぬやうに談してゐるのである。

ふつと、はげしいうなりを立てて、長さ三寸ばかりの大きな蟲が部屋へ飛び込んで来た……飛び込んで来て、くるくると旋つたかと思ふと、壁にはたとまつた。

それは蠅や胡蜂によく似通つてゐた。胴は土灰色で、平たい硬い翼も同じ色であつた。擴げた毛の生えた脚や、角ばつた大きな頭は蜻蛉などに見られる

ものであつた、それにこの頭も脚も血に染まつたやうに鮮紅色であつた。

この奇しげな蟲は絶えず頭を上下に、右に左に振つて、脚を動かしてゐた……やがて、ふと壁から飛び立ち、うなりをたてて、部屋を飛びめぐり、またとまると、再びその場を離れずに、またもや氣味わるく、いやらしくうごめいてゐた。

それは私たち誰にも、嫌悪や恐怖、あまつさへ戦慄の念をすらも起させるのであつた……。誰一人として私たちの中に、こんなものを見たものはなかつた。みな一齊に大聲をあげた、『この怪物を逐ひ出せ！』そして遠くの方から手帕を振つてゐた……一人として敢へて近づいて行かうとするものはなかつた……蟲が飛び揚ると、みな思はず身を避けた。

一座のうちただ一人のまだ若い、蒼い顔をした男が、訝かしげに私たち一同を見廻した。彼は肩をゆすぶつて、微笑んだ、彼には、私たちに何ごとが起つたのか、どうしてこんなに騒いでゐるのかが、はつきりと呑み込めなかつたのである。彼自身は、少しも蟲を見なかつたし、その翼の不氣味なうなりも聞

かなかつた。

不意に、蟲は若者を見据ゑたらしく、飛びあがつて、彼の頭上に身をかがめて、額の、眼のあたりを刺した、……若者は力なく呻いて死んでしまった。

怖ろしい蠅はすぐに飛び去つて行つた……、私たちはその時はじめて、私たちが訪れたものが何であつたかを悟つたのである。

ス ウ プ

百姓の婿やめの一人息子で、二十歳になる、村一番の働き手が死んでしまった。その村の女地主ぢゆうぢいである奥様が、百姓女の不幸を聞きつけて、丁度、葬式の日に見舞に行つた。

行つて見ると彼女は家にゐた。

小舎の真中の食卓の前に立つて、彼女は、ゆつくりと、右手を絶えず同じやうに動かしながら（左手は鞭繩のやうに力なく垂れてゐた）、煤けた壺の底から實みも入つてゐないスップをすくつては、一匙々と呑み込んでゐた。

百姓女の顔は瘠せこけて、黒ずんでゐた、眼は紅く腫れあがつてゐた……

けれど教會にでもゐる時のやうに、きちんと身じまひを正して、いささかも取りみだしたところがなかつた。

『ああ！』と奥様は考へた、『あの女は、よくこんな時に物が食べられるわね。何てあの手合は、がさつな心を持つてるんだらう！』

そこで奥様は、自分が數年前に、生れて九ヶ月になる娘を失くした時、悲しみの餘り、ペテルブルグの近くにある立派な別荘を借りることをも辭つて、ひと夏を市内で暮したことを思ひ出した！ 百姓女はやはり、スープを啜りつづけてゐた。

奥様は、たうとうこらへ切れなくなつた。『タチヤーナー！』と彼女はいつた、『まあ！ 驚いたねえ！ お前は自分の息子が可愛くはなかつたのかえ？ どうしてお前、食慾がなくならないんだらう？ スープなんかどうして食べられるんだらう！』

『うちのワーシャは死んぢまひました。』と、百姓女はしづかに語るのであつた、新たに痛々しい涙が落ち窪んだ頬を傳つて流れて來た、『ですから、も

う私もおしまひなんでございます、もう生きてる空もなくなつてしまひました。けど、スープを無駄にしとく譯には参りませんわ、これにはお鹽が入つとりますから。』

奥様は、ただ肩をすくめたばかりで、それなり出て行つてしまつた。彼女には鹽が廉く手に入つたからである。

瑠璃色の國

ああ、瑠璃色の國よ！ 瑠璃色と光明と、青春と幸福の國よ！私はおまへを……夢に見た。私たちは幾人か、美しい裝飾をつけた小舟に乗つてゐた。風にたのしく翻る旒のもとに、白帆は白鳥の胸のやうにふくらんでゐた。

仲間が誰であるかは知らなかつた、けれど、彼等が私と同じやうに、若い、快活な、恵まれた人たちだとは心の底から感じられた！

それにしても、私は彼等には目もくれなかつた。ただあたりの金の鱗の漣につつまれた、涯知れぬ瑠璃色の海を眺めるだけであつた。頭上にはまた窮りない瑠璃色の海があつて、その間を誇りかに、笑つてゐるかのやうに、優しい太陽がめぐつてゐた。

私たちの間には時折、神々の笑ひのやうに、よく透る、喜ばしげな笑ひ聲が起つてゐた！

やがて急に、誰かの口から話聲が、不思議な美しさと感激の力にあふれた歌ごゑがわき起つた……天も應へてひびき合ひ、……周りの海も心を寄せてふるへたかのやうに思はれた。……しかしまた、そこには泰らかな静寂がかへつて來た。

柔らかな波に軽く浮びながら私たちの早舟は走つて行つた。舟は風に進んで行くのではなく、私たち自身の遊びたはむれる心に導かれてゆくのであつた。舟は私たちの思ふ方へと、まるで生きてでもゐるかのやうに従順に走つて行つた。

私たちは群島にやつて來た、青玉や綠柱石など、寶石の光りかがやく半透明の、不思議な群島であつた。周囲の海岸からは、心を酔はすやうな馨はしいにほひがおしよせて來る。或る島々は薔薇や鈴蘭の雨を私たちにふりかけ、また或る島々からは不意に虹彩の長い翼の鳥が舞ひあがつた。

鳥は私たちのうへを飛びめぐり、鈴蘭や薔薇の花は、滑らかな舳を滑る眞珠のやうな泡沫の中に解けて行つた。

花の芬や香鳥の歌聲とともに、蜜のやうに甘い、甘い調べが聞えて来た：中には女の聲も聞える、……あたりのものは、何もかも——空も海も、高くゆらぐ帆も、艦のあたりにざわめき立つ水の流れも——すべてが戀を語り、めぐまれた戀を語つてゐた。

私たち誰もが戀してゐた女も——その女もまた、其處に……眼には見えず、間近にゐたのである。いまひと時——いまひと時すれば、彼女の眼は輝き、彼女の頬は花のやうに微笑にかがやくであらう……彼女の手はお前の手を取り、お前をとこしへに花咲き誇る天國へと導いて行くことであらう！

ああ、瑠璃色の國よ！ 私はおまへを夢に見た。

二人の富豪

莫大な収入の中から兒童の教育、病者の治療、老人の保護のために巨萬の金を傾つてゐる富豪ロスチャイルドのことを、私の傍で、人が賞めそやす時、私もまた讚嘆し、感動する。

然し、讚嘆し、感動しながらも、私は孤兒の姪を、零落したあばら家に引取つた、或る貧しい百姓一家のことを想ひ起さないわけには行かないのである。『若しカーチカを引取つたら、』と婆さんはいつた、『私たちは彼女のために一文無しになつて、鹽を手に入れる代もなくなるでせう、麵麩に鹽味をつけることだつても能きなくなることでせうし……』

『だつて、あの娘を……いいやな、鹽味なんざつけなくたつて、』と亭主の百姓は答へた。

ロスチャイルドも遠くこの百姓には及ばない！

老人

暗鬱な重苦しい日はやつて来た……

その身の疾患、愛するものの病弱、老いの冷たさ、暗さ。爾が愛したものは、爾が何ひとつ心おきなく身を任せたものは、みなひとしく、凋落しては碎け散つてしまふ。道はもう下り坂であつた。

さて、どうしたらよいのであらう？ 嘆くべきか？ 悲しむべきか？ たとひ、さうしたところで、爾は自分をも他人をも救ひはしないであらう……

枯れかかつて、まがりくねつた樹木に、葉は、いよいよ小さく、いよいよ
尠い、……しかもその緑の色には變りはない。

爾も、縮むがよいのだ、さうして爾自身のうちに、爾が回想のうちへと遷れるがよいのだ。さうしたならば、深く深く、ひたむきな心の奥底に、爾の昔の生活、爾にのみ理解し得る生活が、爾の前に、そのかぐはしい、今もなほ鮮かな緑の色と、春の愛撫と力とをもつて、輝き出ることであらう。

しかし、氣をつけるがよい……ああ、哀れなる老人よ、さらさらに前途を望むこと勿れ！

通信員

二人の友達が食卓テエブルに凭つて茶を飲んでゐる。

街に、ふとざわめきが始つた。もの哀しげな呻きごゑや、烈しい罵詈ののしりごゑや、意地の悪い笑ひごゑが聞える。

『誰かを擲なつてるぞ！』と、友達の一人が窓から覗きながら注進に及んだ。

『犯人をか？ 人殺しをか？』と他の一人が訊いた『そりや、誰でもかまはんが、無鐵砲になぐらせちや置けない。さあ、行つて、庇つてやらう。』

『人殺しを擲つてんぢやないよ。』

『人殺しぢやないつて？ ぢや、泥坊かえ？ どつちだつていいや。行つて、奴等の手から救ひ出してやらう。』

『泥坊でもないよ。』

『泥坊でもないつて？ ぢや、會計係か、鐵道員か、陸軍の御用商人か、露西亞註のメセナート註か、辯護士か、お人よしの編輯人か、社會奉仕家か？ とにかく、まあ、行つて助けてやらう。』

『いいや、通信員が擲られてるんだよ。』

『通信員？ ああ、さうか、そんなら先づ茶を一杯、喫のんでしまはうよ。』

註。露西亞のメセナート……露西亞文藝の保護者パトロン。

二兄弟

それは幻影であつた。

私の前に二人の天使……二人の守護神があらはれた。

私はいふ、天使……守護神と。二人は裸の軀に何ひとつまとはず、二人の肩には二つのしつかりした、長い翼が立つてゐたからである。

二人とも、若ものであつた。一人はいくらか肥つてゐて、滑らかな肌をして、黒い捲髪をしてゐた。鶯色の眼は力なく、濃い睫毛をしてゐた。眼付は人なつこげに、晴々として、貪るやうであつた。顔は魅力に富んで、人を迷はすやうな顔で、わづかに厚かましいところと、わづかに意地悪さうなところがあつた。

紅い、いくらか腫れあがつた唇は軽くふるへてゐた。若ものは力ある者の

やうに——自ら恃むところありげに、氣うとさうに微笑んだ。つやつやしい髪には華やかな花環がしづかに、殆んど天鵞絨のやうな眉毛に觸れんばかりにかかつてゐた。金の矢にとめられてゐる斑な豹の皮は、まるい肩からしんなりした腰へふんはりと垂れてゐた。翼の羽毛は薔薇色にかがやき、その端は生々しい鮮血に浸されたやうに眞紅である。時としてさわやかな銀のひびき、春雨の音を立ててせはしく慄へてゐた。

もう一人は瘠せてゐて、軀は黄ばんでゐた。呼吸をするたびに肋骨がかすかに見うけられた。光澤のある、細く、直々しい髪、大きく、圓い薄鼠色の眼、不安げに、異様にかがやく眼眸……あくまでとげとげしい顔の線、魚のやうな齒をもつた、小さな半ば開かれた口、引きしまつた鶯の鼻、白つぼい絨毛につつまれて突き出した顎。この乾いた唇は、未だ曾て一度として微笑んだこともないのであつた。

それはよく整つた、怖ろしい、冷酷な顔であつた！（尤もさきの美しい方の顔も、愛らしく、快よい顔ではあつたが、見たところやはり情味を缺いてゐ

た)この青年の頭にはいくらかの乾枯びてちぎれた穂が、色あせた草の葉で巻きつけられてゐた。腰には粗い灰色の織布をまとひ、背には光澤のない御納戸いろの翼が、しづかに脅かすやうに動いてゐた。

この二人の若ものは離れることの能きない友達らしかつた。

二人は互ひに肩をもたせかけてゐた。一人はやはらかな手を葡萄の房のやうに相手の瘡せた頸に巻きつけてゐた。長く、かぼそい指をした相手の瘡せた手首は蛇のやうに、女のやうな、さきの若ものの胸のあたりに伸びて行つた。

私に聲がきこえる。その聲は、かういふのであつた。『お前の前にゐるのは戀と飢だ——二人の血兄弟だ、生きとし生けるものの二つの礎だ。』

生きとし生けるものは——食はんがために動き、後繼者を生まんがために食つてゐるのだ。

戀と飢と——その目的は一つである。自身の生命、他人の生命、ひとしくこの世のありとあらゆるものの生命を絶やさせまいとするものである。』

エゴイスト

彼には、その家族を鞭責するあらゆる資質がそなはつてゐた。

彼は生れて健康であり、裕福であつた、また永い生涯を裕福に、健康に暮しつづけて、何一つ罪も犯さず、いささかの過誤をしたこともなく、また一度として言葉の誤りをも、遣りそこなひをもしたことがなかつた。

彼は一點の非の打ちどころもない誠實な人間であつた、……そしてその誠實なことを己惚れて、それによつて身内のものであらうが、友達であらうが、知人であらうが、あらゆる人々を抑へつけてゐた。

誠實そのものが彼の資本であつた……彼はこの資本から過分の高利を収めてゐたのである。

誠實そのものが彼に無慈悲なものとなり、また命ぜられない善事は決してしないといふ権利を興へてゐた、そこで彼は無慈悲であつた……決して善事をしなかつた……何故といふのに、命令されてする善事といふものは、決して善事ではないからである。

彼は自身の——かくも模範的な個我以外には、何人に對しても心を煩はさず、しかも若し他人が同じやうに彼自身のこと熱心に彼の個我に對して心を煩はさなかつた場合には、心から怒るのであつた！

と同時に、自分のことをエゴイストだとは思つてゐないのであつた。そしてエゴイストやエゴイズムを非難攻撃することは人一倍はなはだしかつた、それもその筈！ 他人のエゴイズムは彼自身のエゴイズムを妨げたのである。

彼は自分にはいささかの弱點も認めず、他人の弱點はまるで理解もしなければ、假借もしなかつた。彼は全く、何人をも何物をも理解しなかつたのである、といふのも、彼が四方八方、あらゆる方面から全く自分自身といふものばかりに取りかこまれてゐたからであつた。

彼は恕すといふことがどんな意味なのか、理解すらもしなかつたのである。彼は自分自身を恕さなければならぬ破目には立ち到らなかつた……それにどうして他人を恕すやうな理由があつたであらう。

自身の良心の審判の前に、彼自身の神の前に、彼は、この怪物は、この善行の出来そこなひは、眼を空に向けて、しつかりと、はつきりした聲でいふのであつた、『さうだ、おれは立派な、道義にかなつた人間だ！』

彼はこの言葉を臨終の床で繰返すことであらう……さうして、その時ですらも、この石のやうな心には——この汚點も罅隙もない心には、何等の動搖をも來さないであらう。

ああ、自己満足の、頑強な、安價に購はれた善行の醜惡よ。汝は露骨な不徳の醜惡よりも更に更に醜惡なものではなかつたのか！

神の饗宴

ある時のこと、神が瑠璃色の宮殿に大饗宴を催さむものと思召された。
あらゆる美德が客として招ぜられた。ただ女性の美德ばかりであつた……
男性は招かれなかつた……ただ婦人ばかりであつた。
大きな徳、小さな徳——かなり多くの徳が寄り集つた。小さな徳は、大きな徳よりも一しほ快よく、いとほしかつた。けれど、誰もが満足げであつた——互ひに身寄りか知合ひでもあるかのやうに、打ちとけて語り合つてゐた。

ところが神様は、お互に全く知り合つてゐないらしい美しい二人の婦人にお目どまりあらせられた。

主は一人の婦人の手をとつて、もう一人の婦人の方へと引きよせた。
『恩恵！』と、最初の婦人を指して、主は申された。
『感謝！』と、やがて次の婦人を指して、附け加へられた。
二人の美德はいひやうもないほどに驚いた。開闢以來、すでに久しいことではあるが、この二人はここに初めて出會つたのであつた。

スフィンクス

黄ばんだ灰色の、上の方は脆く、底の方は硬く軋む砂……見わたすかぎり
際涯のない砂だ！

この沙漠の上、この死灰の海の上には、埃及のスフィンクスの巨きな頭が
聳えてゐる。

大きな、突き出たこの唇、静かに擴がつて、仰向いてゐるこの鼻孔、……
この二つの眼、二つの弧弓のやうに見える高い眉の下に、半ば睡り、半ば醒め
てゐるかのやうなこの眼は、何を言はうとしてゐるのか？

それらのものは、何ごとかを言はうとしてゐるのだ。かれらは語つてすら
も居る、——しかもその謎を解き、無言の言葉を解し得るものはただエジプス
だけであつた。

ああ！ 私はかうした面影を識つてゐる……それにはいささかも埃及風な

ところはない、白く、低い額、突き出した顴骨、短い真直な鼻、美しい、白い
齒の口、やはらかな口髭と、ちぢれた顎髯、廣い間を置いて離れてゐる二つの
小さな眼……頭にいただいて居る分けた髪の毛……ああ、これは爾、カルプで
ある、シドルである、セミヨンである、ヤロスラフの、リヤザンの小百姓、わ
が同胞、まぎれもない露西亞人！ すでに爾もまたゆくりなくもスフィンクス
の仲間になつてゐたのか？

爾もまた何を言はうとしてゐるのか？ さうだ、爾もスフィンクスであ
つた。

爾の眼——光彩のない、しかも深いその眼もまた語つてゐるのだ……さう
してその言葉は無言にして謎めいてゐる。

それにしても爾のエジプスは何處にゐるのだ。

哀しいかな！ 爾のエジプスとなるためには、ああ、全露西亞のスフィン
クスよ、百姓帽子をかぶつただけでは十分ではないのである！

ニンフ

私は半圓形をなしてひろがる美しい山脈の前に佇つてゐた。若々しい緑の森が、頂から麓まで掩つてゐた。

山々の上には南國の空が透明に青みわたつてゐた、太陽は山の頂から光りを投げかけて、たはむれ、麓には半ば草にかくれて、小川の早瀬がさざめいてゐた。

私には基督降誕後最初の世紀に、希臘の船が多島海を渡つてゐたといふ古い物語が思ひ起された。

時は眞晝……静かな陽氣であつた。ふと楫取の頭上高く、聲あつて、はつきりと呼ばはるのであつた、『爾、かの島のほとりを行かば、聲高く呼ばはれよ、偉大なる神、パンは死せり』と』

楫取は驚いた……畏れをなした。けれど、船がその島にさしかかると、彼は命に従つて、呼ばはつた『偉大なる神、パンは死せり』と。

すると、直ちにこの叫びごゑに應じて、海邊のつづく限り（その島は無人島ではあつたが）高い歎歎、呻吟の聲、長くひいた哀歎の聲がひびきわたつた。『死せり、偉大なる神、パンは死せり』と。

私はこの物語を思ひ出したのである……すると不思議な考へが私の胸に浮んで来た。『私が若し大聲で觸れまはつたら、どうであらうか？』

それにしても、あたりのものの喜ばしげなのを眺めては、死について考へることは能きなかつた——そこで私は力の及ぶかぎり叫んだのである、『蘇れり！ 偉大なる神、パンは蘇れり！』

すると直ちに、ああ、何たる奇蹟であらう！ 私の叫びごゑに應じて、廣い、半圓形の、緑の山々にうちとけた笑ひのどよめきがひびきわたり、喜ばしげな話聲や拍手の音が起つて来た。『彼は蘇れり！ パンは蘇れり！』と若々しい聲がどよめきわたつた。眼の前にある、ありとあらゆるものは忽ち笑ひ出し

た、空高い太陽よりも輝かしく、草葉のかげの小川のせせらぎよりも楽しげに、軽い足どりをせはしげに踏むのが聞え、緑の密林の間には、大理石のやうに眞白く、ふんはりとした下衣がちらつき、いきいきと紅らむ、あらはな軀がちらちらした……それは、ニムフたちや、ドライアドや、バツカントが高いところから野邊をさして走り寄つて来るのであつた……

彼女たちは、忽ちに森の縁といふ縁にあらはれた。捲毛は神々しい頭にまつはり、しなやかな手は花環や鏡鉞を捧げてゐる、——笑ひごゑは、晴れやかなオリムピアの神々の笑ひごゑは彼女たちの足どりにつれて、流れて来る。

一人の女神が先頭に立つて疾つて来る。彼女はとりわけて背が高く、美しかつた、肩には籠、手には弓、波うつ捲髪には月の銀いろの鎌をもつて……

『ダイアナー おまへがダイアナなのかえ？』

けれど女神はふと立ちどまつた……忽ち後にしたがつてゐたニムフたちもみな立ちどまつた。ひびきわたる笑ひごゑもやんでしまふ。私は口を噤んだ女神の顔が、忽ちにして、死人のやうに蒼ざめ果てたのを見た、いひ知れぬ恐怖

に、彼女の唇は開き、眼が遠くを見つめて、大きく見開かれたのを見た……彼女は何を看たのであらう？ どこを見つめてゐたのであらう？

私は彼女の見つめてゐる方を向いた……

遙か遠い地平線上に、野原のなだらかに盡きてゐるあたりに、基督教寺院の白い鐘樓に、一點の火のやうに金の十字架がきらめいてゐたのである……この十字架を女神は眼にとめたのであつた。

うしろの方で、切れた絃のふるふるやうな、長い嘆息が聞える——ふり向いて見ると、ニムフたちは、あとかたもなく消え失せてゐた……廣い森は以前のやうに青々しく、ところどころに、こまかな網のやうに繁り合つた樹枝の間に何か白いものばかりが見えかくれしてゐた。それはニムフの白衣であつたか、谿の底から蒸氣があがつて來たのであつたか……それは知らない。

然し、消え失せた女神たちを思つて、私はどんなに悲しんだことであらう！

敵と友と

終身禁錮に處せられた囚人が牢を破つて、一目散に逃げ出した……彼の後には追跡隊が踵を接して後を跟けてゐた。

彼は一所懸命に逃げて行つた……追手はおくれはじめた。

然るに、見よ、彼のゆく手には、斷崖絶壁をなした狭い——しかも深い河があるのである……それに彼は遊ぶことができないのである。

一方の岸から一方の岸に、薄い朽ちた板が投げ渡されてゐた。逃げ手は早くもその板に片足をかけたのである……すると、偶々、川の兩岸には彼の最も良い親友と、最もひどい怨敵が立つてゐた。

怨敵はものをもいはず、ただ腕を拱いてゐるばかりであつた。友はと見れ

ば、聲をかぎりて叫び出した、『おうい？ 何をするんだい？ 氣が違つたのか、しつかりしろ！ 板がすつかり腐つてるのが分らないのか？ 乗つたら最後、身體の重みで折れちまふんだ——そしてきつと死んぢまふぞ！』

『だつて外に渡りやうがないぢやないか！ 追手の來るのが聞えないのか！』
あはれな男は、絶望的な呻きごゑをあげて、板を踏んだ。

『斷然、いけない！ ああ、君の死ぬのを見てはゐられない！』と熱心な友だちは叫んで、逃亡者の足もとから板をひつたくつた。男は忽ちにして逆巻く波に墜ちて、溺れてしまつた。

怨敵は満足さうに笑ひ出した——そして、行つてしまつた。けれど親友は岸にどつかりと腰をおろして、彼のあはれな……あはれな友人を思ひ、悲しげに泣きはじめた。

尤も、彼は友を死に致らしめたことについて、自分自身を責めようなどとは……ただの一瞬間も……思はなかつたのである。

『おれの言ふことを聽かなかつたからだ！ 聽かなかつたからだ！』と彼

はがつかりして呟いた。

『しかし』と彼はやがて言ふのであつた、『どうせ奴は一生涯、怖ろしい牢屋で苦しまなけりやならなかつたんだ！』少くとも今は苦しまなくて済むんだ！今はもう樂になつたんだ！かうなるのも因果だつたらう！しかし、とにかく人情として、いかに可哀さうだ！』

この親切者は運の悪い友だちを思つて、やるせなく、すすり泣くばかりであつた。

基督

私は青年の、といふよりもまだ少年の自分が、村里の、天井の低い禮拜堂のうちにゐる夢を見た。微かな蠟燭のあかりは、赤く點々と、古びた聖像の前に燃えてゐた。

虹のやうな光の環が、ひとつびとつの小さな焰を繞つてゐた。會堂の中は冥く、ぼんやりしてゐた。……けれど私の前には人々が群をなしてゐるのであつた。

どれもこれも亞麻色の髪をした農夫の頭であつた。夏の風が波のやうに、そよそよと吹きわたる時の垂穂のやうに、時々揺れうごいたり、垂れたり、ま

た擡つたりしてゐた。

ふと、見も知らぬ人がうしろからやつて来て、私の隣に坐つた。

私はふりかへりもしなかつた。が、忽ちにこの仁こそ、まぎれもない基督であると感じたのである。

感動、好奇心、恐怖が、立ちどころに私の心を捉へてしまふ……無理に私は心をひきたてて、この隣人に見入るのであつた。

ありとある人間の面輪——すべての人間の相形にまがふかたなき顔。眼は注意深げに、靜かに上の方を向いてゐた。唇は緘ぢられてはゐたが、決して結んでゐるのではなかつた。ただ、上唇が下唇のうへに休んでゐるに過ぎなかつた。僅かな髯は、左右にわかれてゐた。手は組合せられたまま、微動だにもしない。しかも着物は、ありふれたものであつた。

『何といふ基督であらう！』私は考へた、『こんな平凡な、平凡な人間が！さういふわけがあるものか！』

私は顔をそむけた。しかし、やはりこの平凡な人間から眼をそらすことが

能きなかつた。すると、また自分の傍に立つてゐるのは、本當の基督だといふ氣がして來たのである。

私は再び、再び自分を引き立てようとつとめた……

かくて、世のあらゆる人々の顔に似た顔、見ず知らずではあるが、そこにもここにも見受けられるやうな面持をした顔を、重ねて見るのであつた。

そのうちに、急にぞくぞくして、眼が覺めた。——この時はじめて、かうした顔、すべての人間の顔によく似たこの顔こそ、正しくも基督の顔である……と悟つたのである。

巖

あなた達は、うららかな春の日の満潮時に、海邊の年經た灰色の巖に、荒浪が四方八方からうちつけ——うちつけ、戯れ、撫でさすつて——苔むした巖の頭上に、こまごまな眞珠を撒き散らすやうに、かがやく泡沫を撒き散らすのを見たことがあるだらうか？

巖はいつも變らぬ巖ではあるが、——その灰色のおもてには鮮かな色彩があらはれて来る。

その色彩は溶けてゐた花崗岩が、やうやく凝まりかけたばかりで、紅焰の色に燃えてゐたあの遠い太古を物語る。

かやうに、私のこの頃の老いた心にも、若い女の心の波があたりからおしよせて来て、そのやはらかな愛撫の手に、私の心はすでに久しく褪せてゐた色彩、むかしの火の名残を浮べて、赤らみかけたのであつた。

浪は遠ざかつた……けれど、その色彩はまだ褪せなかつた——烈しい骨を刺すやうな風がたとひ乾かしてはゐるにしても。

鳩

私は傾斜をなした丘陵の頂に佇つてゐた。眼の前には、熟れた裸麥が、金か、銀の海のやうに延び擴がつて斑らになつてゐた。

けれど、この海の上には漣ひとつ起らず、息づまりさうな大氣は、ちつと静まりかへつてゐた。大暴風雨がまさに來ようとしてゐるのである。

あたりには、陽かげがなほ暑く、どんよりと耀いてゐたが、裸麥のむかうの、程遠くもないところには、暗碧の雨雲が重苦しい塊をなして、地平線の半ばをすつかり蔽つてしまつてゐた。

あらゆるものは影をひそめ……あらゆるものは、太陽の最後の光の不氣味な輝きのもとに、萎れきつてゐた。一羽の鳥のこゑも聞えず、かげも見えず、雀までがかくれてしまつてゐた。ただ何處か近いあたりで馬路の一つの大きな

葉が、たえずばさばさ囁いてゐた。

地境の苦蓬は何といふ強い香りを放つてゐるのであらう！ 私はあの碧い塊を見やつた……すると何とはなしに不安の念が私を襲ふのであつた。『さあ、早く、早く！』と私は考へた。『閃け、金の蛇よ、鳴れ、雷よ！ 動け、急げ、篠つく雨となれ、意地悪の雨雲よ、このなやましい懈怠を早く切り上げてくれ！』

しかし雨雲はちつとして動かなかつた。雨雲はひそまりかへつた大地を壓しつけて……一層ふくらみ、一層暗くなつてゆくやうに思はれた。

やがて一色の青雲のうへに、何かしら白い手帕か、雪の塊のやうに、すうつとかるく、ちらついたものがあつた。それは村の方から白い鳩が飛んで來たのであつた。

鳩は飛んだ、ただ真直に飛んだ、……そして森の中にかくれて行つた。しばらく経つた、——やはり氣味わるいほど、ひっそりしてゐる。しかも見よ！ 今は二つの手帕が閃いてゐる、二つの塊が引返して行く。二羽の白鳩が相並ん

で、家路をさして歸つて行くのである。二匹の白狐は、
つひに嵐は来た！私はやつと家へ駆けつけた！
風は吼える、狂氣のごとく狂ひまはる、人蔭色の、低い、ちりぢりを引き
ちぎられたやうな雲は駛る、何もかも渦巻き亂れる、雨は篠つく雨となつて、
地をうち、立木をゆるがし、電光は青光りして眼を眩まし、雷鳴は砲聲のやう
に轟き渡り、あたりに硫黄の匂ひがみなぎる！

けれど、屋根の庇のかげの明り窓のへりに、二ひきの白い鳩は互ひに寄
り添つてとまつてゐる、それは仲間をたづねて飛んで行つた鳩と、つれ歸つて
來た、恐らくは救つてやつた鳩とであつた。

二ひきの鳩は羽根をひろげて、互ひに翼の觸れ合ふのを感じてゐる。

彼等はどんなにたのしいであらう！私も彼等を眺めるのはたのしい……
私はただひとり、いつものやうにただひとりの身ではあるが。

自然の苦難

自然

私は高い穹窿のついた、大きな地下の部屋に入つた夢を見た。そこはどこ
かしら地の下らしい、おだやかな光にみたされてゐた。

その部屋の眞中には、緑いろのやはらかな衣服をつけた、威嚴のある女が
坐つてゐた。頭を手で支へて、深い思ひに耽つてゐるかのやうであつた。

私はすぐにこの女が『自然』そのものであると悟つたのである、すると忽
ち私の魂に畏怖の念が泌みわたつて急に寒氣がして來た。

私は坐つてゐる女の所に近づいて、恭々しく一禮し、『ああ、私たち、す
べてのものの母よ！』と叫んだ、『あなたは何をお考へになつてゐるのでせ

う？ 人類の未來の運命についてではございませんか？ それとも人類が、どうしたら至高の完璧や幸福に達し得られるかといふことでせうか。』

女は黒い、きつい眼をおもむろに私に向けた。唇は動いて、鐵のひびきのやうな、よく徹る聲が聞えて來た。

『私はね、蛋が一層たやすく敵から逃げられるやうに、その足の筋肉にどうしたら大きな力を與へられるか、考へてるんです。攻撃と防禦の均衡が破れてしまつた……それを元のやうに直さなくてはならないのです。』

『何ですつて？』 と私はぼんやり答へた、『あなたは何を考へてらつしやるんです。わたしたち人間は、あなたの寵兒ではございませんか。』

女はかすかに眉を擧めた、『あらゆる生物は私の子供です。』 と彼女はいつた、『だから同じやうに、みんなのことを氣づかひ、——また同じやうに亡ぼすのです。』

『けど、善は……理性は……正義は……』 と私はまた口ごもつた。

『それは人間のいふ言葉ですよ。』 と鐵のやうな聲が響き渡つた、『私は善

をも悪をも知らない……理性なんて私の法則ぢやありませんよ……それに、正義つてどんなものかしら？ 私はおまへに生命いのちをやつた——私はそれをお前からとれば、またほかのものに、蟲けらにでも人間にでもやる……わたしはどつちだつてかまやしない……だからお前も自分をまもつて、私の邪魔などしないがいいよ。』

私は逆はうとしてゐた……けれど地面はあたりに鈍い呻きごゑを發して震へ出した——そこで私は眼が覺めた。

明日こそは！明日こそは！

過ぎた日は、いかばかり空虚しく、味気なく、徒爾なもののみであつたらう！それは、いかばかり僅かな痕跡をとどめることであらう！次から次へと、時はいかばかり無意味に、おろかしく過ぎ去つて行つたのであらう！
とはいへ、人はなほ生きようとする、人は生に執着し、人は生に、おのが身に來るべきものに望みをかける……ああ、人はいかなる幸福を未來に期待するのであらう！

しかもまた次に來るべき日もまた、今しがた過ぎて來た日と異らぬとは、
どうして考へないのであらう？

人はそれを想ひやつても見ない。およそ考へることを欲しないのである、
……それはいいことである。

『明日こそは！明日こそは』と人は自らを慰める、しかもこの『明日こそは』が彼を墓場へ陥し入れるのである。

さて——一たび墓に入つてしまへば——否應なしに考へることをやめてしまふであらう。

絞罪にせい！

『千八百三年のことぢやつたが、』と私の年老いた知合ひが話し出した。『アウステルリッツ役の少し前ぢやつたよ、儂が士官として勤めてゐた聯隊は、モラギアに宿營してゐた。』

儂らは土地の人たちに迷惑をかけたか苦しめたりしないやうにと嚴命されてゐた。味方といふことにはなつてゐたのだが、彼等は儂たちをおそろしく猜疑の眼をもつて見てゐたからだ。

儂のところには、もと母の奴隸だつたイエゴルと呼ぶ從卒が居つた、あれは律義な、おとなしい男だつた。儂は子供の時分から、あれを知つてゐて、友達扱ひにしてゐた。

ところで、ある時儂の暮してゐた家で、罵り叫ぶこゑや、痛哭くこゑが聞え出した。主婦が牝鶏を二羽盗まれて、その罪を儂の從卒になすりつけたんだ。あれは自分でも言ひわけし、儂をも證人に呼んだ……「何だつて、このイエゴル・アフタモノフが盗みをするなんて！」儂は主婦にイエゴルが正直なことを言ひ聞かしてやつた、けれど、儂のいふことなんかで馬耳東風だつた。

すると、ふと街路の方を足並揃へてゆく馬の蹄の音が聞える。司令長官が幕僚を率ゐて來たんだ。

長官は並足で驅つてゐた、でつぶりした人で、うつむいて、胸には肩章が垂れかかつてゐたつけ。

主婦は長官を見ると、まつしぐらに馬のところへ驅け寄つて、ひざまづいて、髪をふり亂し、あられもない姿で、大きい聲で儂の從卒のことを訴へはじめ、奴を指したんだ。

「將軍様」と主婦は叫んだ、「お殿様、どうかお審き下さい、お助け下さい！ お救ひ下さいまし！ この兵隊が妾のものをひつたくつたんです！」

イエゴルはと見れば、帽子を手にして、家の戸口にすつくと立つてゐる、まるで番兵みたいに胸を張つて、おまけに足をひきつけてさ——さうしてたつた一言も口がきけねえのさ！ 街の真中に立どまつた將軍の一行がすつかり奴をどぎまぎさせたものか、それとも身にふりかかつてゐた災難を怖れて硬くなつたものか——可哀さうに、イエゴルは、突立つて、眼をばちくりさして、粘土みたいに血の氣をなくしてゐるばかりなんだ。

司令長官は落ちつかない、氣味のわるい一瞥をくれて、怒つたやうに「さうか」といつた、——イエゴルは彫像のやうに突立つたまま、齒をむき出してゐた。傍から見たら、まるで笑つてでもゐるやうに見えただらう。

すると長官は、「奴を絞罪にせい！」と言ひ放つて、馬に拍車をあててどんどん歩き出した、はじめは並足で、それから跑で。一行はあとをついて驅けて行つた。ただ一人の副官が鞍の上から振り向いてイエゴルをちらと見た。

いふことを聴かないわけには行かない……イエゴルはぢきにつかまへられて處刑に引立てられた。

あれはもう人心地もなくなつた、——ただ二度ほど辛うじて言ふだけだつた、「ああ、神様！ 神様！」それから低い聲で、「神様こそ御存じだ、私ぢやないんだ！」

それはそれは悲しさうに、儂に別れを告げながら奴は泣き出しちやつた。

儂はすつかり絶望してゐた。「イエゴル！ イエゴル！」と儂は叫んだ。「何だつてお前は將軍に何とも言はなかつたんだ！」

「神様が御存じです、私ぢやないんです！」と可哀さうに、しくしく泣きながら繰返すのだつた。

主婦は自分でも怖ろしくなつて來た。こんな怖ろしい處刑は思ひもよらなかつたのだ、そして今度は自分でも大聲で泣き出した！ 誰も彼もに赦しを乞ひはじめ、牝鶏が見つかつたことや、自分が事のいきさつを説明しようとしてることを説きまはるのだつた……

無論、何の足しにもならなかつた、何しろ、君、戦時の行きがかりだ！ 軍紀だからね！ さて、主婦はますます大聲で泣くのだつた。

イエゴルは坊さんに最後の祈禱いのちをして貰ふと、儂おのの方をふり向いた。

「旦那さま、主婦さんに悲しまないやうにつて、言つてやつて下さい、……私にはもう悪く思つちや居りませんから」

私の知合ひは彼の従卒のこの最後の言葉を繰返して、かう呟くのであつた、『イエゴルウシュカ、可哀さうな奴、義理がたい奴ー』涙は彼の年老いた頬を傳はるのであつた。

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、

薔薇はなの葩はなは……

どこかで、いつか、かなり前に、私は一つの詩を読んだ。それはすぐに忘れてしまつてゐた……けれど最初の一行は、はつきりと私の記憶にとどまつてゐた。

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇はなの葩はなは……

今は冬、霜は窓硝子を蔽ひ、暗い部屋には一つの蠟燭ともしが灯つてゐる。私は部屋の隅にひっそりと坐つてゐる、すると脳裡には絶えず、

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇はなの葩はなは……

といふ句がひびくのである。

私は露西亞の郊外の家の、低い窓の前にゐる自分を思ふ。夏の夕べは靜かに暮れて、夜に移る。暖い空氣に木犀草や菩提樹の花の香りがする。窓には、さしのべた手に軀を寄せ、頭を肩によせかけて、一人の少女が坐つてゐる——物をもいはず、瞬きもせず、最初の星の現はれるのを待つかのやうに、空を見つめてゐる。物思はしげな眼は、何といふ無邪氣な、感激にあふれたものであらう、開いた唇、何か訊ねたさうな唇は、何といふ、人を動かすやうな無邪氣さをもつてゐるのであらう。まだ花の全く咲ききらない、まだ何ものにも掻き亂されたことのない胸は、何といふおだやかな息づかひをしてゐるのであらう。初々しい面ざしは、何といふ清らかな、優しいものであらう！ 私は敢へて彼女と話をしようとはしない。けれど彼女は私にとつて、いかばかり愛しい女なのであらう、またどんなに私の胸はときめいてゐることであらう。

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇の葩は……

しかも部屋の中は、いよいよ暗くなつてゆくばかりである……燃えさがつ

た蠟燭はばちばちと音を立てる、低い天井には蒼白い影が揺れる、霜は部屋の外に軋めき、荒立つ、——もの悲しい老人の咳きが忍ばれる……

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇の葩は……

またちがつた面影が私の前に現はれる……田舎の家庭生活の樂しげなどよめきが聞える。二つの亞麻色の頭が、互にもたれ合ひながら、まともに私を見てゐる。薔薇いろの頬は笑ひを抑へて顫へ、手はなつかしげにもつれ合ひ、若しい、善良な聲は入り亂れて聞える。また少し向うの、小ぢんまりした部屋の奥では、別の、同じやうに若々しい手が、指をまごつかせながら、古いピアノの鍵盤の上を走つてゐる、ランネルのワルツの曲は大長老めいたサモワルの煮えたぎる音を消すことが能きぬ……

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇の葩は……

蠟燭はちらちらして消えてしまふ……誰か知ら、あんなに嗔れた聲で、微

かに咳嗽せきをしてゐるのは？ 私の足もとには、私のただひとりの伴侶ともの老いた
牡犬べスが、うづくまり、寄り添つて、身ぶるひしてゐる……私は寒い……私は凍
える……ああ、みな彼女たちは死んでしまつた……死んでしまつた……

いかばかり美はしく、鮮かなりしか、薔薇の葩は……

航海

私は小さな汽船に乗つて、ハンブルグからロンドンへ航海した。乗客は私
達ふたりであつた、私と小さな猿と。猿はウィスチッチ種の牝で、ハンブルグ
の或る商人が、英吉利の同業者なかまに贈物として遣るものであつた。

猿は細い鎖で、甲板の椅子の一つに繋がれて、もがいたり、鳥のやうに、
もの哀れな聲で啼いたりしてゐた。

私が傍を通るたびに、猿は黒い、冷たい手を差しのべて、悲しげな、殆ん
ど人間のやうな眼で私を覗くのであつた。私が猿の手をとると、猿は啼いたり、
もがいたりはしなくなつた。

この上もない風であつた。海は鉛色の、さゆらぎだもしない卓布たふしのやうに、

あたりに擴がつてゐた。海は小さく思はれた。濃霧は海の上にかかつて、船檣の尖端をも覆ひ隠し、やはらかな靄に眼は眩み、疲れるばかりであつた。太陽は、この靄の中に、どんよりとした赤い斑點のやうに懸つてゐた、それが暮れる前には不思議に奇妙に燃えついて赤らむのであつた。

重たい絹織物の褶のやうな、長い、眞直な褶は、次から次へと舳を遠ざかつて、絶えず、圓を描き、皺をよせては、また圓を描き、つひには皺をのばして、ゆらゆらと揺れて消えて行つた。けうとくめぐる車輪にかき亂された水の泡は巻きあがり、ミルクのやうに白くなり、微かにシューシューと音を立てながら、蛇のやうにうねうねした波をつくつて碎け、やがてまた融け合ひ、靄に呑まれ、また消えて行つた。

猿の啼ごゑのやうに絶えず、もの哀れげに艦のあたりで小さな鐘が鳴つてゐた。

時として海豚が浮び上つた——だしぬけにもんどり打つて、かき亂されたとも見えぬ平らかな水の面にかくれて行つた。

船長といふのは、日に焦けた、陰氣な顔をした、黙りがちな男で、短いパイプを燻らしては、腹立たしげに、澱みかかつた海の上に唾を吐いてゐた。

私が何を訊いても、きれぎれに、ぶつぶつ答へるばかりであつた、仕方なしに、私はただひとりの道づれである猿の方を向かなければならなかつた。

私は猿の傍に坐つた、猿は啼きやんで、また私の方へ手をさしのべた。

ぢつとして動かない霧は、眠氣を催ほしさうな濕りを、私達ふたりに浴せかけるのであつた、同じやうにぼんやりした氣持になつてゐた私たちは、互ひに肉親のやうに近く寄り添つて暮してゐた。

いま私は微笑んでゐる——けれどあの時の私には、ちがつた氣持があつた。

私たちはみな同じ母の子である、——そして私には哀れな小さい獸が、あんなに私をたよつて、おとなしくなり、肉親のやうに私に憑りかかつてくれるのが嬉しかつたのである。

私は何を考へることであらう？ ……

私が死ななければならぬ時に、若しその時に考へることができたとしたならば、私は何を考へることであらう？

一生を徒らに過してしまつたこと、寝て暮してしまつたこと、微睡み通したこと、人生の賜物を翫味し得なかつたことなどを考へるであらうか？

『どうしたといふんだ？ もう死ななければならぬのか？ こんなに早く？ さういふ譯があるものか？ おれには未だ何一つ爲し遂げられなかつたんぢやないか……おれは、やつと何かしようと目論んだばかりなんだ！』

私は過ぎ去つたことを思ひ起すであらうか、自分の過して來た、僅かばかりの耀かしい刹那を、貴い面影や面貌を思ひ浮べるであらうか？

自分の悪行を憶ひ回すであらうか——さうしてあまりにも遅い後悔の念の燃えるやうな苦しみが私の胸におし寄せて來るであらうか？

あの世で私を待ちうけて居るものについて考へるであらうか……さうして事實、何ものが其處で待つて居るのであらうか？

否、……私は考へまいとするであらう、——行く手を暗くしてゐる怖ろしい暗黒から自分自身の注意を外らさんが爲にのみ、強ひて何等かの取りとめない事に泥むことであらう……さういふ氣がするのである。

私の眼の前で、曾て或る瀕死の男は乾胡桃を嚙ましてくれないといつて、泣言をいつてゐた、……しかもそこには、彼の陰つた眼の底には、傷づいて將に死なうとしてゐる鳥のちぎれた翼のやうに、何ものが苦しげに慄へてゐたのである。

留れ！

留れ！ いま私がおまへを見るままに、永久に私の記憶にとどまるがよい。
唇から最後の感激のこゑは離れ去つた、眼は耀きもせず、閃きもしない！
—眼は幸福の重荷、あのおまへが表はすことの能きた美しさ、おまへの勝ち誇
つた手、疲れはてた手を、その方へ差しのべてゐるかとも思はれたその美しさ
のめぐまれた意識の重荷を負はされて陰つてゐる！

何といふ光が、太陽の光よりも淡く、清らかに、おまへのからだの隅々に、
おまへの着物の極めて小さな襷にまでも注がれてゐたのであらう。

いかなる神がおまへの亂れた捲髪を、愛撫の息を吹きかけて、なびかせた
ことであらう？

神の接吻は、おまへの大理石のやうに蒼ざめはてた額に今も燃えてゐる！
これこそ、暴かれたる祕密、詩歌の、人生の、戀愛の祕密である！ これ
が、これが即ち不死そのものである！ これを外にして不死なるものはあり得
ないのである、またあるを要しないのである。この瞬間に於て、おまへは不死
のものである。

この瞬間は過ぎて行くであらう、さうしておまへはまた一塊の灰、一人の
女性、一人の子供となつてしまふ——しかも、それがおまへにとつて何であら
う！ この瞬間におまへは一切を超越したのである、あらゆる流轉するもの、
無常なるものを離れてしまつたのである。このおまへの瞬間は永遠にきはまり
ないであらう。

留れ！ さうして私をもおまへの不死にあづからしめよ、私の魂のうちに
おまへの永遠そのものの反射をおとしてくれ！

高僧

私は隠者であり、聖徒である一人の僧を知つてゐた。彼はただ祈禱のみを愉しみにして暮してゐた——祈禱に専念して、實に久しい間、教會堂の冷たい床の上に佇ちつづけてゐたので、足が膝から下が腫れて、柱と思はれるほどになつてゐた。彼はそれをも感じないで、佇つたまま——祈禱しつづけてゐたのである。

私は彼の心をよく識つてゐた、おそらくは彼を羨んでゐたであらう、それはそれとして、彼もまた私の心を識つてゐて、私を非難するやうなこともないのであつた、彼の法悦にはなほ及びがたいこの私を。

彼は努力によつて彼自身を、自身の憎むべき『自我』を滅却することを得たのである。尤も私もまたさうではあつたが、私は自尊心からはなしに、祈禱といふものを全くしないのである。

私の『自我』は、私にとつて、おそらく彼が自身の『自我』に對する以上に、重苦しく、忌はしいものなのであらう。

彼は自分自身を忘れる方法を見出した……私もまた見出してはゐる……不斷にといふわけではないけれども。

彼はいつはりを言ひはしない、……然も私もまたいつはりを言ひはしないのである。

我等はなほも闘はう！

採るにも足らないやうな瑣細な事が、時として、人一人をまるで變へてしまふことがあるものである。

或る時、私は深い思ひに沈みながら、國道を歩いてゐた。

重苦しい豫感が胸を壓しつけて、私は憂鬱な氣持にとりつかれてゐた。

私はふと頭を擡げた……私の前には、高い白楊が兩側に竝んだ間を、矢のやうに遠く道が走つてゐた。

それを横ぎつて、その道を横ぎつて、私から十歩ほどむかうのところを、明るい夏の日ざしに金色にかがやきながら、一群れの雀が列をつくつて跳ねてゐた、いかにも元氣よく、面白さうに、時を得顔に！

わけても、中の一羽は、胸をふくらませて、何ものをも怖れないかのやうに傲りかに、あたりかまはず轉りながら、傍へ傍へと跳ねて行つた。ああ、征服者だ——全く！

この時、空高く一羽の兀鷹が輪を描いて飛んでゐた、おそらく、兀鷹は征服者を食ふやうに運命づけられてゐたのであらう。

私はこの有様を眺めて、笑ひ出し、軀をゆすぶつた——すると憂鬱な考へは、忽ち消しとんでしまった。同時に私は勇氣、剛膽、生への欲求を感じたのである。

私の上にも輪を描いて飛ばば飛べ、ああ、兀鷹……
我等はなほも闘はう。何のその！

しとやかに、しづかに、泣くこともなく、微笑むこともなく、何事にも冷やかな心の眼を向けて、煩はされることもなく、爾は人生の行路を辿る。

爾は氣だてよく、聰明に……しかも、あらゆるものは爾にゆかり無く——
爾は何人をも必要とはしない。

爾は美しい——爾がその美しさを重んじてゐるか、ゐないかは誰一人としていふことができないであらう。——爾自らは人に冷やかである——そしてまた人の憐れみをも求めはしない。

爾の眸は深い——けれど物思はしげなものではない、その明るい深味のな
かは空虚である。

かうしてシャンゼリゼエの大通りをグリユクの重々しい調べにつれて、——
悲しむことなく、喜ぶことなく、しとやかな影は過ぎてゆく。

闕

私は巨きな建物を見る。前の壁には、狭い扉が開け放してある。戸外には
陰氣な霧がこめてゐる。高い闕の前には娘が立つてゐる……露西亞の娘。

先きも見えぬ霧は霜を感じさせ、凍みつくやうな寒い空気の流れとともに、
建物の奥からは、ゆるやかな、幽かなこゑが聞えて来る。

『ああ、おまへ、どうしてこの闕を跨がうとしてゐるの、何がおまへを待
ちうけてゐるか、知つてゐるのかえ？』

『知つてますわ。』と、娘は答へる。

『寒さ、饑ゑ、憎しみ、嘲笑ひ、慊惡、辱しめ、牢獄、病患、死そのもの？』
『知つてますわよ。』

『遠離、全くの孤獨が？』

『よく知つてますの。心を決めてゐますの。わたしはどんな打撃も、みんな忍びますわ。』

『敵からばかりではなく、肉親からも、友だちからも離れる？』

『ええ、みんなから。』

『よろしい。犠牲にならうとしてるんだね。』

『さうですわ。』

『莫迦々々しい犠牲にかえ。おまへは滅びるんだよ、——滅んだら最後、誰一人として、一人だつて、おまへを思ひ出してもくれないだらうよ。』

『私に感謝だの、憐憫だのつて要りませんわ、私には名も要らないんですの。』

『おまへは罪を犯さうとしてゐるのかね？』 娘はうなづいた。

『罪をも犯すつもりですの。』

もう彼の聲は、すぐに新しい問ひを發することができなかつた。

『おまへは知つてるのかね、』と彼はたうと言ひ出した、『いま信じてゐるものを、信じないやうになる時があること、おまへが瞞されて、若い日をつまらなく過してしまつたことを悟れる時の來ることを。』

『それは知つてますの、わたし兎に角、入りたいんですわ。』

『入つたらいいさ。』

娘は鬨を跨いで行つた、——すると後から重たい幕が下りた。

『腑抜け奴！』と誰かが後で齒ざしりした。

『聖女だ！』どこからか應答が聞えて來た。

祈 禱

人は何を祈らうとも、つまりは奇蹟を祈るのである。いかなる祈禱も悉く次の言葉に歸してしまふ。

『偉大なる神よ、一二ヶ四たることなからしめ給へ。』

ただかうした祈禱のみが、人から人への祈禱なのである。

全世界の靈に祈り、天の神に祈り、カントの、ヘーゲルの、純粹なる、形象なき神に祈ることは不可能なことであつて、考へられもしないことである。しかも人格のある、生命のある、形象のある神ですらもが、一二ヶ四たることのないやうに爲し得るものであらうか。

すべての信者は「得る」と答へなければならぬ、またこのことを自らに信じさせなければならぬ。

とはいへ、理性が彼をして、かかる荒唐無稽に反抗せしめたとしたら？

その時にはシェイクスピアが助けに来るであらう、『この世には多くのものがあるのちや、わが友ホレエシオよ……』等々。

けれど若し眞理を楯にして彼が反駁されたとしたら——かの有名な問ひを繰返すべきである、『眞理とは何ぞや？』と。

さらば、飲み且つ楽しみ——祈らうではないか。

露西亞語

疑ひ惑ふ日にも、祖國の運命を思ひ惱む日にも、爾おんみのみがわが杖であり、柱であつた。ああ、偉大にして、力強き、眞實にして、自由なる露西亞語よ！爾おんみがなかつたならば、今、わが國に行はるるあらゆる事どもに面して、どうして絶望に陥らずに居られるであらうか？ 然しながら、かかる言葉ことばが、偉大なる國民に與へられたものでないとは信じ得られないことなのである。

未發表散文詩

雙生兒

私は雙生兒の口論してゐるのを見た。水の二つの滴のやうにかれらは顔の輪郭といひ、表情といひ、髪の色合といひ、身の丈といひ、軀つきといひ、どこもかしこもそっくりであつた、かれらは互ひに憎しみ合つてゐた。

かれらはひとしく憤怒に齒をくひしばつてゐた。間近につき合した、奇妙なほどによく似た顔はひとしく憤怒に燃えてゐた。

よく似た眼を共にかがやかし、眼にただ事ならぬ様子を偲ばせてゐた。聲色の同じい罵詈の言葉は、同じやうにゆがめた唇から洩れて來るのであつた。私は見るに忍びなかつたので、一人の手をとつて鏡の前に連れて行き、かういつたのであつた『もうこの鏡の前で罵倒した方がましなやうだぜ……君には別に變りはなからうから……さて僕はさうすりや氣が樂になるんだ……』

奇遇(夢)

私は夢を見てゐた、暗く低い空のもとに、大きなごつごつした巖の散在した、荒莫たる草原を私は歩いてゐたのである。

巖の間には小さな徑が通つてゐた、……私はどこへ、何のために行くのかもわからずに小徑を辿つてゆくのであつた……

ふと小徑のむかうの方に、淡いちぎれ雲のやうなものがあらはれた……私ははたと眼をつけはじめた、小さな雲はやがて、すんなりした背の高い、白い衣服を着て、細く輝かしい腰帯をしめた女の姿となつた……女はいそぎ足に私をどンドン遠ざかつて行つた。

私は女の顔を見なかつた、髪の毛すらも見なかつた、それは波のやうなやはらかな布につつまれてゐた、けれど私の心は女のあとを追つてゐた。女は美しく、あてやかな、なつかしいひとと思はれた……私は切に追ひつかうとし、女の顔を……女の眼を……一目なりとものぞいてやらうと考へた……私は女の眼をよく見たかつた、よく見なければならなかつた……

しかも、どんなに私があせつても、女はいよいよ足早に進んでゆくのである、どうしても追ひつことができない。

するうちに、小徑にあたつて、平たい、大きな石があらはれて……女の行く手をはばんでゐた。女は石の前に踏みとどまつた……、私はよろこびと心待ちにふるへながら駆け寄つて行つた、恐怖などはさらさらに持ち合はしてはゐなかつた。

私は一言も、ものをいはずなかつた、……が、女はしづかに私の方をふりむいた。

私は未だに眼を見なかつた。眼は瞑ぢられてゐた。

顔は白く……身にまとふ物のやうに眞白であつた、あらはな手はちつと垂れてゐた。女はまるで石のやうになり切つてゐるのであつた。軀からだといひ、顔の線といひ、全く大理石像のやうであつた。

女はいささかも肢體かみだをまげずに、徐ろにうしろにさがつて、平たい石のうへに身をよせた。もう私も墓のうへの彫像のやうに身をのぼして、女と並んで嚴かに両手を胸におしあてて、仰向けに横たはつてゐるのであつた。私もまた石のやうに硬まつてしまつたのだと考へた。

しばらく経つた……女はふと起ちあがつて私のもとを離れて行つた。

私は女にとびつかうとした、けれどすこしも動けず、組みあはせた両手をひろげることも能きなかつた、ただいひ知れぬ悲しみにみだされて、後を見送るばかりであつた。

すると女は急にふり向いた、私は若々しい、動かぬ顔に、明るい、射るやうな瞳を見たのである。女は私に瞳をむけて、口もとにかすかな微笑みを浮べてゐた……ひびきなく……『起て、わがもとに來りたまへ』

けれど私はなほ身動きが能きなかつた。

すると女はまた笑つたかと思ふと、たのしげに頭をふち振りながら足早に遠ざかつて行つた。頭のうへには、ふつと小さな紅い薔薇の花冠がかがやいた。

しかも私は自身の墓石のうへに身じろぎもせず、ものをも言へずに居るばかりであつた。

私はあはれむ……

私はあはれむ、自分自身を、他人を、あらゆる人々を、獣を、鳥を……生きとし生けるものを。

私はあはれむ、いはけなきものを、年老いしものたちを。幸うすきものを、めぐまれしものを……幸うすきものにもまして、めぐまれしものを。

私はあはれむ、勝ち誇れる将帥を、偉大なる藝術家を、思想家を、詩人を。

私はあはれむ、人殺しを、その犠牲を、醜なるもの、美なるもの、抑壓するもの、抑壓するものを。

私はどうしてこの憐憫を逃れたらよいのか？ 憐憫ゆるに、なりはひが能

きぬ……憐憫よ、また更に懈怠よ。

ああ、懈怠よ、憐憫によつてのみおこる懈怠よ！ 人はこれ以下になることはできないであらう。

最早、自分は羨んだ方がましであつたらう、たしかに！ そこで私は石を羨むのだ。

呪咀

私はバイロンの『マンフレッド』を読んでゐた……マンフレッドに殺害された女の怨霊があらはれて、彼に奇怪きはまる呪咀の言葉を述べる場面に到つて、私はおのづからなる戦慄を覚えてゐた。

あの、記憶しても居られることであらう、『これから眠れぬ夜々が來ればよい、爾おんみの邪惡な魂が、眼に見えず執拗につきまとふ妾を感じ、魂そのものが爾自身の冥府ともなるやうに』

さて、私には別のことが思ひ浮んだのである……ある時、露西亞に在つて私は父と子、二人の農夫の酷い争ひを目撃したことがあつた。

息子はつひに父に忍ぶべからざる罵言をあびせかけた。

すると老母が『呪つてやれ、ワシリキツチ、呪つてやれ、不孝者めを！』と叫んだ。

『まあ、いゝや、ペトロオヴナ』老父がかすかな聲で應へて大きく十字を切つた、『母親の眼の前で、父親の白らがの髻に唾をかけるやうな息子が、こいつにも出来るんだ！』

この呪ひの言葉は私には『マンフレッド』の呪咀よりも怖ろしかつた。息子は口をあけてゐた、よろめいて顔を眞蒼にして出て行つた。

黒 鶉

私は寢床に横たはつてゐた、けれど眠れはしなかつた。心の煩らひが、私を責め苛むのである。空合ひのさだまらない日に、灰色の丘陵のいただきを絶え間なく、次から次へと這ひめぐつてゆく雨雲のやうに、重苦しい、けうとい思ひが、私の脳裡を徐かに行き過ぎるのであつた。

ああ、年老いて、心は冷え、頭に霜をいただくやうになつてからでなければできないやうな、やるせない傷ましい戀を私はしてゐたのであつた……精も根も盡きはてた私の心はもはや若くもなく、いや、若くある必要もなければ、若かつたところで仕方もないのであつた……

私の前には、ほの白い點のやうに窓の幻影があらはれてゐた。部屋のなかのありとあらゆる物象が、おぼろげに眼にうつつてゐた。それらのものは、夏の晨朝の灰色の薄ら明りにいよいよ静まりかへつてゐるやうに思はれた。私は時計を見た、三時に十五分前であつた。家の壁のむかうにも深い静寂が感ぜられた……さうして露、はてしない露の海。

この庭の露のなかに、私の窓のすぐ上のあたりには、もう黒鶉がさわがしく聲たかく、誇りに歌を歌ひ、囀つてゐるのであつた。よく透る聲が、私の部屋に忍び込んで、部屋中にみなぎり、私の耳に、味氣ない不眠と、苦しい心の傷みに惱まされた私の脳裡にみちあふれた。

その聲音は不易なるものもつ、恒に新鮮なるにほひ、あくまでも冷靜なところ、不易なるものちからを感じさせる。自然それ自身の聲が黒鶉の聲に聞かれるのである。いつ始まつたともない、美しい無意識なこゑは、決して終りはしないであらう。

黒鶉は歌ひ、黒鶉は口ずさぶ、誇りにこの黒鶉。かれはいつものやうに、

あの變はることのない太陽がぢきに輝き出すことをよく識つてゐた。黒鷓の歌には、自分自身のもとは何ひとつなかつた。千年の昔にこの太陽をよるこび迎へた黒鷓は、やがてまた、ともすれば、いささかの私の死友が、風のまにまに眼にもとまらず、あのいきいきした聲をあげる黒鷓のからだをとりかこむかも知れない幾千年の後にも、あの太陽をよるこび迎へることであらう。

哀れな、魯かしい戀の奴の、ひとりの男、私はお前にいはう、ありがたう、小鳥よ、もの憂い時に、私の窓かげにふと聞えて來たおまへの力強い、氣ままな歌にお禮をいはう。

小鳥の歌は、私をしづめてはくれなかつた。私もまた、やすらひを求めもしなかつた。けれど、私の眼は涙に濡れてゐた。ゆくりなくも、胸にはしづかな死の辛苦くろしみがうごめき、高まりかかつてゐた。ああ、この生きものは、若々しく、みづみづしくはないのか、あのこゑのやうに、夜あけの歌うたひのやうに！ 今日といはず、明日の日に私を漕ない大洋に運び去る冷い波が、あたりからおしよせて來てあふれてゐる時に、自分自身を苦しみ、嘆き、煩らひ、考へ

るがものはないのではなからうか。

涙は流れてゐた。けれど、いとしい黒鷓は、何ごともなかつたかのやうに、あどけない、幸福な、永遠の歌を歌ひつづけてゐた。

ああ、やうやく現れた太陽の光が、私の頬の何といふ涙を照し出してくれたことであらう。

しかも私は前のやうに微笑んでゐた。

黒 鷓 また

私はまた床に臥つてゐる……私はまた眠れない。夏の晨朝は今も私を四方からおしつつかんでゐる、私の窓の下には今も黒鷓が歌つてゐる、このころのなかには相も變はらぬ傷手が燃えあがつてゐる。

けれど私のところは黒鷓の歌にやはらぎもしない、それに私はいま私の傷手を思ひもしない。

ほかの數へきれないほどの生々しい傷手が私を悩ますのである。傷からは眞紅の滴をなして、いとしい、惜しい血が、あの高い屋根から街の埃や芥のうへに落ちる雨水のやうに、たえ間なく、味氣なく流れる。

今や幾千の同胞や友だちは、遠いあなたの城塞の堅固な牆壁のもとに亡んでゆく、幾千の同胞たちは、無能な首領たちのために、張りひろげられた死の良に、はかない犠牲として投げこまれる。

彼等は泣きもせず亡びる、彼等は容赦なく亡ぼされる、彼等は自分自身を悲しみもしない、またその首領たちとても彼等を悲しみはしない。

そこには正しいものも、罪を犯したものもない。打禾機は穂束をたたき、空穂であるか、粒がついてゐるかは、時が経てばわかるであらう。それにしても私の傷手は何なのか。私の苦惱は何を意味するのか。私は敢へて泣かうとはしない。しかも頭は熱し、氣は失ふ、また私は、罪びとのやうに枕邊に頭をかくす。

熱い、重々しい滴が私の頬にあつまり、流れる……唇のうへにも滑り落ちる……これは何なのか、涙か、……それとも血であらうか。

時もなく

いづこにこの身をかくすべきか？ 何を私は目論むべきか？ 私ははぐれた鳥のやうによるべない身である。ふふ毛を逆立てながら小鳥は花も葉もない枯木の枝にとまつてゐる。いつまでとまつてゐるのも堪へ難い……けれど、どこへ飛んで行つたらよいのか？

やがて小鳥は翼をひろげる——おそろしい兀鷹に逐ひ立てられた鳩のやうにまつしぐらに、はるか遠くにつき進んでゆく。どこかの緑のかくれがに身をかくすことはできないものか？ どこかに、たとひ暫らくなり、小さな罫を營むことはできないものであらうか？

小鳥は飛ぶ、飛ぶ、心をくばりながら下を瞰おろす。

下には黄色い荒野がある、こゑもなく静まりかへつて死んだやうな……

小鳥はいそぐ、荒野をわたる、たえず瞰おろす、心して、物かなしげに。

下には海が、黄いろな、荒野のやうに死にはてた海が……海はさわめき動いてはゐるが、はてしない海鳴りに、波の単調なうねりにまた生氣なく、どことして身をかくすやうなところもない。

あはれな小鳥は疲れはてた……翼をあげる力も弱る。すばやく飛ぶこともできなくなる。空高く舞ひのぼることができたなら……しかもこの底ひも知れぬ虚空にはまた巢を営み得ないのではないか？

小鳥はつひに翼をたたむ……呻きのこゑもいよいよ低く小鳥はつひに海に墜ちる。

海が小鳥を呑んでしまつた……相も變はらず波は心なげに、さわめきながら押してゆくばかりであつた。

さて私はどこへ身を寄せたらよいのか？ もうこの私も海に墜ちるべき時ではないのかな。

杯

私は可笑しい……私は自分自身に驚く。

私の苦惱は空ごとではなかつた、私には生きることがまことに苦しく、私の感情は苦しみに充ち、ただ佗しい。それにも拘はらず、私は感情に光彩を興へようと努めてゐるのだ、私は形象を、また對照を求める、私は辭句を整へる、言葉の餘韻や諧調をたのしむ。私は彫刻師のやうに、貴金屬師のやうに、自身の仰ぐべき毒を盛る杯を熱心に、型どり、刻み、様々な裝飾を施すのだ。

誰の罪

女はわたしにしなやかな蒼白い手をさしのべた……、けれど、私はひどく粗々しくその手を突きつけた。若い、やさしい顔に當惑の色があらはれた。若若しい、人のよい眼が私をとがめるやうに見つめてゐる。若い、淨らかなころには私の氣持が呑みこめないのである。

——私に何の科がありますの——彼女の唇がつぶやく。

——あなたの科つて？ とてもまばゆい大空の奥の奥で、とても晴れやかな天使だつて、あなたよりは先に罪を犯すこともあるだらうにね。

けど、兎に角、あなたの罪は僕にとつては大きいんだ。あなたはそれが識りたいのか、あなたにはわからない重い罪を、僕にはどうしても説明する勇氣のないこの重い罪を？ それはほかでもない、あなたが若いのに、このわしが老いぼれてゐるといふことだよ。

處生訓

安らかに暮りたいのか、それなら人々と交はるがよい、けれどひとりで生きるがよい、何ごとをも企てず、何ものに未練もたぬがよい。幸福に暮りたいのか。それなら懊惱くわうむことをまなぶがよい。

爬蟲

私は身を斬られた爬蟲を見た。血漿と自身の排泄物の粘液とを溶びて、かれは猶ほ身を痙攣させ、わなわたとふるへながら舌を出して鎌首をもたげた……かれはなほ脅かした……力なく脅やかしてゐた。

私は侮辱された三文文士の雑文を読んだ。

自身の垂涎に咽び、自身の醜惡な膿汁のなかに抛り出されてゐる彼もまた、身をすくめ、身をくねらせてゐた……彼は、「barrier」に就いて述べるのであつた。彼は血闘によつて、自己の名譽を！名譽を恢復しようと申し出たのである。

私は、けがららしい舌を出してゐるあの斬られた爬蟲を思ひ出した。

作家と評論家

作家が自分の部屋の仕事机のところに坐つてゐた。そこへ突然評論家がやつてくる。

『何うして！』と彼は叫んだ『君はやはり書いたり、作つたりしてるんだね、あんなに、僕がやつつたのに大論文や覺書や通信の中で、つねに君には何等の才能もないことや、もとだつてありはしなかつたことや、君が本國の言葉さへ忘れてしまつたことや、いつも君は無學をさらけ出すので有名だつたのに、今では氣もぬけて、古臭くなつてしまつて、眼もあてられなくなつたことを、二二が四といふやうにはつきりと證明してやつたのに！』

作家は落ちつきはらつて批評家の方を向いた、『君は僕をやつつける論文や戯文をすゐぶん書いたねえ』と彼は答へた、『ところで君は狐と猫の寓話^{はなし}を

知つてるだらうね？狐には、かなりするいところがあつたのに、まんまと良に落ちこんだ。猫はただ樹に攀ぢのぼるよりほかなかつた……そして犬も猫には寄りつけなかつた。僕もまあかういつたものさ、僕は君の論文に對する應答^{こたへ}をたつた一冊の本のなかに述べつくして置いたよ。君の賢明な頭へ僕は道化の帽子をかぶして置いたよ、だからその帽子をかぶつて子孫の前で威張つたらいいのさ！』

『子孫の前で！』と批評家は哄笑^{わら}つた、『さも君の本が子孫の頃まで残りでもするかと思つて！四十年五十年と經ちや、誰一人讀むものかね。』

『大きに御尤もな話だ、』作家が答へた、『けど、僕はそれでもいいよ、ホーマーは永遠のフェルシータを書いたんだね、ところが君たちには五十年位が眼安なんだからな、どうせ永持ちはないんだから、さよなら、……氏、まあ、僕に本當の名前で君の名を呼ばせたらどうかね、尤もそれは必要もなからうかね、たとひ僕がゐなくなつて、みんなが名前は呼ぶだらうから。』

『ああ、わが青春よ』

ああ、わが青春よ！ ああわが生氣よ！ といつかは私も叫んだものであった。

かう叫んだ頃には、私もなほ若く、生氣にあふれてゐた。

私はただその頃には、憂鬱な感情によつて、自身を甘やかし、——自身を
あはれみ、ひそかに愉しまうとしてゐたのである。

いま私は沈黙し、失はれたものを大ごゑをあげて歎き悲しまうともしない
……失はれたものは絶えず微かな腹の痛みのやうに私をひどく責め苛みはする。
いや！ 考へねえ方がましなんでさ！ 百姓たちはさういつてゐる。

……に

それはよく轉る燕でもなく、鋭く強い嘴で、堅い岩を刳つて巢をつくつた
すばしこい岩燕でもなかつた……

それは無情な、よその家族に、すこしづつ住みなれて、つひにその家のも
のとなつたあなただつたのだ。辛抱づよい、聰明な愛しいひとよ！

私は高い山々の間を、清らかな河のほとりを
谷から谷へと行くのであつた、……
瞳に映るありとあらゆるものは、
ただひとつのことを私に語る。
自分は愛されてゐた、愛されてゐた、この私は！
私はほかのことを忘れはててゐた！

私は高い山々の間を行くのであつた

Гыцкнъ Гыцкы

По гну конурунъ. По гну мѣромѣнѣмъ пѣггунъ.
О цытѣмъ мѣлѣ. пѣгунѣ - мѣлѣ агунѣ мѣлѣ мѣлѣ.
гѣтѣмъ и мѣлѣ. и мѣлѣмъ. мѣлѣмъ. мѣлѣмъ. мѣлѣмъ.
Сѣлѣмъ Гыцкнъ Гыцкы! - По гытѣ мѣлѣ - мѣлѣ
те мѣлѣмъ мѣлѣ мѣлѣмъ. мѣлѣ мѣлѣ мѣлѣ. мѣлѣ мѣлѣ
мѣлѣмъ гѣтѣмъ? - По мѣлѣ мѣлѣмъ. мѣлѣ мѣлѣ
мѣлѣмъ мѣлѣмъ гѣтѣмъ мѣлѣмъ мѣлѣмъ.

Font. 1882

空は高く光り、

葉はそよぎ、鳥は歌ふ……

雲は嬉々としていづくともなしに

つぎつぎに飛びわたり……

あたりのものは何もかもめぐみにあふれ、

しかも心はめぐみに不自由はしなかつたのだ。

波ははこぶ、私をはこぶ、

海の波のやうに寄せてくる波！

こころにはただ静寂があつた、

喜びや悲しみ超えて……

やうやくにして心に思ふ、

この世はみな私のものであつた！ と

かかる時に私はどうして死ななかつたのか、

さうしてふたり何ゆゑに生きて來たのか、

歳月としづきは遠くうつる……うつろふ月日つきひ、

さうしてあの魯かしくめぐまれた日にもまして

何ひとつとして甘美うまはしく明るい日を

與へてはくれなかつたのだ！

私がこの世を去つたなら

私がこの世を去つたなら、私と名のつくものがあとかたもなく灰になつて消え失せてしまつたなら——ああ、わたしのただ一人の友よ、眞實、この底から深く深く愛してゐたひとよ、生涯わたしにまことをたててくれたひとよ——あなたはわたしの墓には來ないがよい……來ても仕方がないのだよ。

わたしを忘れてはくれるなよ……とはいつても日ごとそくのわづらひや、足不そく足の中に、わたしのことなどを想ひ出してはいけないよ……わたしは生活の邪魔をしたくはないのだから、安らかな時の流れをかきみだしたくはないのだから。尤も獨り居るとき、優しい心の持主にはよくあるやうに、おどおどとした、

わけのわからない哀愁にとらへられた時には、わたしたちが愛讀してゐた本の一冊を取つて、そこから——ほら、覚えてゐるだらうね？——よく二人が思はず一緒にひそかな甘い涙を流したあの頁を、あの行を、あの言葉をお探しよ。

それを讀んだら、眼をつむつてわたしに手をさしのべるがよい。……居らなくなつてしまつたおまへの友に、おまへの手をさしのべるがよい。

わたしは、このわたしの手で、おまへの手を握ることは能きないだらう。わたしの手は地つちの下で冷たくなつて居るだらうから。

けれど、きつとおまへは自身の手に軽い接觸を感じてくれるだらうとおもふと、私はほんたうに愉快になれる。

そして私の姿がおまへの前に現はれる。おまへの瞑ぢた眼瞼の下から涙がこぼれる。丁度いつかわたしたち二人が、『美』に感激の涙を流した時のやうに。ああ、わたしのただ一人の友よ、ああ、眞實、この底から深く深く愛してゐたおまへよ！

砂時計

月日は痕跡をもとどめず、単調に、すみやかに過ぎ去つてゆく。

生くる日はおそろしく疾く過ぎて行つた。丁度、瀑布にかかる川の流れのやうに疾く、音もなく。

また死の神の瘦せおとろへた手に握られた砂時計のやうに、いつも同じやうにさらさらとこぼれ落ちる。

わたしが床に横たはつてゐると、闇が四方から私を押しつつんでしまふ。

その時、私は流れ去る人生のあの微かな絶え間ない囁きを感じる。

わたしは人生を惜しみはしない、また更に爲し得るかもしれないことをも哀惜しはしない……わたしは苦しいのだ。

わたしの寢臺の傍にはあの死の神の不動の姿が佇つてゐるやうな気がする、片方の手には砂時計を持つて、片方の手は私の心臓のうへに置いて……

胸の奥で私の心臓は顫へ、高鳴つてゐる、まるで大いそぎに最後の鼓動をうたうとでもしてゐるかのやうに。

夜半に眼ざめて……

夜なかに私は寢床から起き上つた……

誰かが名を呼んだやうな気がしたのである……暗い窓のむかうの方で……私は窓硝子に顔をおしあてて、耳をすまし、眼を瞠つて——待つてゐた。けれど窓のむかうには、樹々が單調に、しかも雜然と——ざわめてゐるばかりであつた。濃い、煙のやうな雲は動き、絶えずうつろひながらもいつまでもいつまでも同じであつた——天には星かげもなく、地には火影もない。外はさみしく、もの憂げである。丁度わたしの心の中のやうに。

しかもふと、どこか遠くの方から、悲しげな聲が聞えて来て、いよいよ高まり、近づいて来て、人間の聲となつた。やがてまた低くなり靜かに消えて行つた。

『さよなら！ さよなら！』

聲の消えてゆく時に、わたしはこんな言葉を耳にした。

ああ！ わたしの過去のすべては、わたしのあらゆる幸福は、わたしが愛し、いつくしんだありとあるものは、永劫にわたしを去つて、再びここに歸つては來ないのだ！

わたしは飛び去つて行く私の生涯にぬかづき、寢床のうへに横はつた……まるで墓に入つたやうだ。

ああ、これがまことの墓ならば！

ひとりである……(分身)

ひとりであると、永いこと全くひとりであると、急に誰かもう一人ほかの人間が同じ部屋にゐて、並んで坐つてゐるやうな、または背後に佇つてゐるやうな氣がして來る。

振り向いたり、あるひは不意にゐる氣はひのするあたりへ眼を遣つても誰も眼につかう筈がない。そこで人が身近にゐるといふ感じは消えてしまふ……けれどしばらくするとまた還つてくる。

時をり私は両手で頭を押へながら、その人間のことを考へて見る。

抑々何人であらう？ 何者であらう？……彼はわたしに無縁のものではな

い……彼は私を知つてゐる……私も彼を知つてゐる……彼は私と血を分けたもののやうである……しかも兩人の間には深淵が横たはつて居る。

私は彼から物音や言葉を期待してはゐない……彼は口をきくことも、動くこともできないのである……しかもなほ彼は私に語る……何かしらぼんやりした、わけのわからないこと……わかつてゐることを語る。彼は私の祕密をすっかり知つてゐる。

私は決して怖れはしない……しかし、一緒に居るのは不安であり、また私の心の奥まで見抜いて居るやうな人間を有つてゐたくはない……それにしても私に全く縁のない獨立した存在であるとは考へられない。おまへは私の分身ではないのか？ 私の過去の自我ではないのか？ たしかに私のよく識つてゐる人たちと——今の私との間には、こんな深淵が横はつてゐるのではなからうか？ 彼はわたしの命令によつてやつて來るのではない、自分で勝手にやつて來るらしい。

厭はしい獨り居の侘びしさに包まれてゐるのは、兄弟よ、おまへにも私に